

俳句雜誌

令和二年四月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十二卷第四号

# 水 明

2020 4月号



《今月のかな女》

かち渡る流れ早しや山櫻

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

春の山里に響く鳥の声と清流の音。いま浅瀬を渡っているのはかな女であろうか。着物の裾をたくしあげ、流れに脚を取られぬよう慎重に歩を進めている。さほどの川幅ではないが、当人にとってはかなりの冒険なのである。

対岸には、満開の山桜が、渡りびとを心配そうに見守っている。

(鬼之介・註)

— 華の一句 —

## 妻の仕草ふつと彼の夜の雪女郎

正 木 萬 蝶

雪女郎を詠んだ例句は多いが、雪女郎のイメージに固執した月並句がほとんどである。しかし、掲句には、御伽噺の世界ではない現実感のある怖さが漂っている。それは、夫が己と雪女郎の間に妻の然りげ無い仕草を介在させ、しかも、作者が雪女郎になりきって詠んでいるからである。

(鬼之介・推薦)

# 水 明

令和 2 年  
4 月 号

華の一句

蛇の目傘(作品)

山本鬼之介

4 1

雛まつり(近詠)

山中 順子

6

街道は今(近詠)

星野 和葉

7

冠 木 門 ※主宰作品の鑑賞

境 延昭

8

硯箱 ※季音月評

井口 俊晴

10

季音「雪」(同人作品)

石井 喜恵	石山 かつ子
大橋 她代	ほか

12

季音「月」(同人作品)

荒井 俱子	高島 寛治
十倉 和子	ほか

19

季音「花」(同人作品)

井上 玲子	松井由紀子
梅澤 佐江	ほか

24

鼓 笛 集 (同人作品)・私の一句

50

現代俳句鑑賞

網野 月を

28





# 水明集

保坂 翔太  
野田 静香  
正木 萬蝶  
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

44

水 琴 窟 (水明集二月号鑑賞)

池田 雅夫

48

俳誌望見

梅澤 佐江

53

句集喝采

近藤 徹平

54

水明の記事掲載他誌転載

43・55

水明例会報・各地句会報

57・60

第二回水明忌

大村 節代

66

九十周年のご案内

68

全国大会兼題句募集

65

風声・発展基金御礼

70・71

後記

72

題字：長谷川かな女 表紙：内田恵子 カット：福田千春

---

---

# 蛇の目傘

山本 鬼之介

薄氷を八咫鏡に屋敷神

拙宅にいま妙齡の枝垂梅

内弟子の伏目の応<sup>いら</sup>へ春の雷

---

靡より令和の御世へ平家琵琶  
鉄火肌蛇の目にかくし春時雨  
無粋にも乙女椿を囲ふ塀  
うららかなや平均台の脚線美  
花ぐもり松の位の遊女塚

---

# 雛まつり

山中順子

からくり時計の四方からくり雛の街  
下戸なのについ淡麗甘口雛まつり  
白酒を御気に召されて腫れ臉  
雛の灯を薄明りにして喪の灯  
流れ里の雛ゆるやかに着て雅  
ひなたちよねむつておくれ夜を閉づ  
雨の夜の和紙の湿りを雛納め

2月22日岩槻人形博物館がよいよ開館した。古くから人形のまちといわれる岩槻がこの街の人形づくりに関わる象徴的な施設である。展示されるのは「犬筥」「天児」「這子」で徳川家ゆかりの品でその大きさと美しさはすばらしく、価値のある名品が展示されている。又恒例行事である上巳の節句に併せたまちかど雛めぐりが開催される。

今年は新型コロナウイルスのため今は閉館しているが再び開館の折はご連絡頂ければご案内します。

# 街道は今

星野和葉

俳聖の一步一步に芽吹きかな  
今昔を暗渠に流し紅白梅  
句碑の食ふ草加煎餅いぬふぐり  
雪隠といふも今風スイトピー  
旧道の町屋に「塩」と梅日和  
空海とあらば参らむ梅の寺  
木の芽張る学校の名が駅名に

案内をして下さる人を頼って、さほど遠くない所に住んでいるのに、行く機会が無かった「草加宿」を歩く。煎餅で知られる街なのに、何軒かの煎餅屋にシャッターが下りていたのは一寸寂しい。

「おくのほそ道」の中で最初に登場する宿が草加である。芭蕉像、曾良像を仰ぎ、空の色は昔と変らないのだろうなと思いつながら、綾瀬川に沿って歩く。五、六羽の鴨の中に川鶉が一羽「昔のこと何でも訊いて」という様にこちらをちらちら。

幹周り二メートルもある老樹もまじる松並木の景観はすばらしい。

# 冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

一月号

大山が小山したがへ初御空

元日の空をいう季語「初空」の傍題に初御空がある。「御」の一字があることよって、空を敬う気分が加わる。元日の空や山を敬う特別な気分は日本人特有のものである。山に大小で序列がある筈はなく、普段見慣れた景色であつても元日ならではの淑気を醸し出している。創刊九十周年を迎える主宰ご本人の正月の気分そのものであろう。

馬上軍扇直実公に淑気充つ

直実公は熊谷直実、鎌倉初期の武将。頼朝に付き平家討伐に軍功があつた。一の谷の戦で平敦盛を斬つた話が有名で平家物語をはじめ謡曲・浄瑠璃・歌舞伎に残されている。埼玉県熊谷市、JR熊谷駅の正面にその銅像が立っている。前片足を蹴り上げた馬に跨り軍扇を掲げた像は凛々しく市民の誇りでもある。

初富士を借景にして麴藏

酒、醬油、味噌をはじめ熟鮭そして家庭での糠漬に至るまで日本は発酵食品の宝庫と言われる。それら発酵作用を促す代表株が麴菌である。日本古来の伝統的なものではあるが、現在は各種医療品の開発など先端科学の一端を担っている。句の麴藏は代々続く造り酒屋のそれに違いない。累代伝え継いだ麴菌を守り、その年の酒造りの初段階である発酵を促すための麴藏である。杜氏は温度や湿度など細心の注意を払い発酵を見守る。「初富士を借景にして」の措辞は麴藏の存在感のみでなく、オマージュの気持ちを含めて詠まれている。

男衆の締むる春着の帯の音

男衆をとこしは祇園など京の花街で舞妓や芸妓の着付けを担う人たちのこと。舞妓や芸妓を抱える置屋に呼ばれ、舞妓たちの着付けを手際よくこなしていく。花街の奥に通じた数少ない男たちである。だらりの帯で知られる舞妓の帯、七メートル近いと言う。その年のその妓のために詠えた春着と帯、見る事の出来ない花街の奥、音を詠むことで現実味を出す。

## 市ヶ谷のとある屋敷の歌留多会

市ヶ谷で思い当たるのは今は防衛省、昔三島由紀夫が割腹自殺した地である。元は尾張徳川家の上屋敷で、明治になって陸軍士官学校が置かれ今も自衛隊の本拠地である。台地をなし、他の台地同様江戸城を守るべく旗本、御家人の屋敷が集中した土地柄である。近く神楽坂の方には十万石余の若狭藩の上屋敷もあった。ご尊父は若狭の出、作者も昔に疎開の経験がある。

五十年近く前、三橋敏雄の絶讃を得た「マネキンを目白へ運び冬霞」の目白同様に詮索の必要はない。地名は多用されると所謂手垢が付きイメージが定着する。季語と凭れ合ったり、食い合ったりしかねない。

昔風の静かな佇まいの屋敷を思い描けば十分である。

## 小鼓を締むる弓手も寒稽古

寒稽古と言えば柔、剣道など武術のものと考えていたが、音曲や舞など稽古事にもあることを知った。鼓は胴の両側に皮を張りその締め加減で音色を調節する。日頃余り使うことのない左手で強く抑えて締めるのであろう。助詞「も」が小気味良く決っている。

## 一月や蒔絵の箱に夜叉の面

能で使う夜叉面であろう。壁に掛けられた状態で見たことがあるが、蒔絵の施された箱に収まるとなればさぞや古く由緒のある面であろう。蒔絵は奈良時代に起源をもつ日本の伝統工芸である。以前、金沢で金箔工場と蒔絵の作業場を覗いたことがある。漆を塗った上に金粉や銀粉などで色絵を付けそれを又研ぎ出したり気の遠くなる工程のようである。夏も扇風機など御法度の作業場であった。特別な時に宝物のような特別の道具をもって舞い終えたのであろう。体言だけで詠み「や」の切字がびたりと決まる。

## 帯の鳴る着付け教室春近し

和服の着付けなど嫁入り前に母親が教え込んだものだろうが、その母親が自分一人では着られない時代になった。帯の端を啜え間を置かずすつと着こなせたのは大正世代までか浅草など、着物姿の若い娘を見かけるが大半は異国人のようである。成人を前に着付け教室に通うのであれば喜ばしい限りである。やや上気した若い娘たちを想像するが覗く訳にはいかない。帯の鳴る音で状況を想像するよりない。下五「春近し」の季語で華やいだ中の様子が察せられる。



# 硯箱

◆季音二月

井口俊晴

初霜や西郷さんに鳩の糞

網野 月を

西郷さんの銅像は明治三十一年に除幕式が行われたというから、もう百二十年もの間、上野公園のあの場所で頑張ってきたことになる。身長三<sup>尺</sup>七<sup>寸</sup>〇<sup>分</sup>の巨漢だ。一緒にいるのはツンという雌の薩摩犬で、バランスを考えて、少し大きめに作ってあるそうだ。冬の朝のこと、西郷さんの青銅の体には霜が白く降ったうえに、頭や肩にはなんと鳩の白い糞まで垂れている。お気の毒さま。

屋台のおでんぼつりぼつりと愚痴こぼす

永野 史代

いつもの場所にお爺さんが曳いてきた屋台に明かりが灯り、暖簾越しに客の男女の影が見える。すでに何人かは帰ったが、一組だけずっと居座っている。お銚子が空き、横に倒してある。酔いが回って来たのか、一人が重い口を開く。愚痴を聞くと気分が減入るが、聞いてやらなければ友達甲斐がないというもの。ぼつりぼつりと話す相手に、ぼそぼそと答える。

夜は長い。

黒堀の冬日に欠伸烏猫

茂木 和子

穏やかな冬の午後、お富さんの歌でもないだろうが、ちょっとばかり粹な黒板堀の上を、これまた毛艶がよい黒猫が器用に歩いている。と、猫は体を一瞬反らせ気持ちよさそうに欠伸をしたではないか。その間だけ、猫の周囲の時間が止まったかのように感じられた。これは江戸時代の俗信だが、肺結核の患者さんが真つ黒な烏猫を飼うと、病気が治ると信じられていた。なんだか烏猫にはオーラがあるようだ。

枯蓮や検査を受くる骨密度

川崎 道子

人生百年時代を明るく元気に生きるためには骨折してはいけない。骨粗鬆症になると骨が委縮し折れやすくなる。量の縁に躓いて転んだだけで寝たきりになったりする。そうならないためには、運動や食事に気を付けるだけでなく、骨がもろくなっていないか、骨密度検査を受けておくことが大切だ。

結果によっては整形外科で飲み薬を投与される。蓮の葉が茶色く枯れ、茎ばかりとなってへし折れようと、人間はそうはいかない。

鯉 悠光のうごく白障子 十倉 和子

冬の日本庭園、街の喧騒から隔絶され、ここだけの時間が過ぎていく。よく手入れされた庭に緑の苔が美しい。中央の池には枝ぶりの良い松が影を落としている。時々パシャッと水音がするのは、大きな緋鯉が体をくねらせ、向きを変えるせいだ。微妙な動きが反射する光の変化となり、池の端に立つ茶室の白障子の上に、淡々とした影を投げかける。

落款の朱肉の匂ひ都鳥 伊藤 敦子

春の展覧会シーズン控え、半切の紙に古今和歌集から引いた作品を書き上げた。なかなか思うように書けず、何十枚も反故を作ってしまったが……。最後に翡翠の印に朱肉をつけ落款を押す。この時期は寒さで朱肉が硬くなるので、そっと温め、柔らかくしてから慎重に押す。落款で作品の醸す雰囲気気が全く違ってくるのだから不思議だ。都鳥の白い体が、嘴と脚の赤さでより優美に都ぶりを發揮するように、落款の朱が作品の雰囲気を高めてくれるのだ。

炬燵の上に「巖窟王」と「噫無情」 内田 恵子

ついさっきまで炬燵に転がって本を読んでいた子供が部屋を出て行った。何を読んでいたのだろう。背表紙に「巖窟王」「噫無情」とあるではないか。前者はデュマの「モンテ・クリスト伯」で、後者はユゴーの「レ・ミゼラブル」。岩波文庫などで読むことが出来る。「巖窟王」「噫無情」は明治時代に翻訳・紹介された時の題名だ。ところが、最近ではテレビアニメになったりして人気となり、明治の翻訳名を冠して、易しく読める文庫本まで出ているようだ。文学青年、文学少女の時代は遠く、世の中はどんどん変わっていく。

山茶花の紅を崩して鳥あそぶ 原田 想子

寒い朝、山茶花の垣根の前を歩くのは楽しいものだ。生け垣一面に咲く赤や白の山茶花は豪勢で美しい。ただ、難があると言えば、触るとポロポロ花弁が落ちてしまうことか。このため放っておくと家の前が汚らしくなってしまう。そんな家人の悩みをよそに、小鳥がやって来ては山茶花をつついて回る。蜜を吸っているのか、紅色の花びらを嘴でつついては崩す。可愛いが困ったものだ。

季  
音  
雪



陽の匂ひ  
石井喜恵

初湯して先づ一憂を流しけり  
雪吊りの妥協許さぬ縄の張り  
まんさくや風と分け合ふ陽の匂ひ  
薄氷や童心くすぐる杖の先  
春近し小さき帆の立つオムライス

春  
裕  
石山かつ子

老いてなほ華やぐごとし春の風邪  
斜に構へたるお見合の春裕  
失言のあとの千慮や冴返る  
無鉄砲な漢が走る薄氷  
蔵の戸は隙を許さず余寒なほ

鷹のシヨ一 大橋 廸代

鷹のシヨ一城の鳶ども急降下  
少年の手に頬ずりを春の鹿  
撫牛とおのが頭なでて受験生  
冴返る庭の人魚と欠け薬研  
暮六つに泣く赤ん坊猫の妻

梅の宿 大村 節代

足長の少女駈け出す春時雨  
軒先に見知らぬ 姫 春時雨  
春時雨こんなところ冠木門  
人力車にをとことをんな梅の宿  
山椒の芽叩いて飾る玉子焼

豆の花 栢尾 さく子

春の霜残る一畝犬が嗅ぐ  
武蔵野の雨やさしかり豆の花  
身の上を語り出したる春シヨール  
吹かれきて黄蝶よろめく句碑の前  
容赦なく古い進みをり春鏡

春の雪 菊池 ひろこ

ノックせし書齋は無入春の雪  
春雪の宙も未来も無音なり  
灰色に舞ふ片恋の春の雪  
薄氷へ紙飛行機の傾斜角  
薄氷を次つぎ渡り女囚めく

山尽くる村 小林 萬二郎

魚河岸の境 延昭

わが里は山尽くる村春時雨  
鯨尺考の筆跡針供養  
母の胼胝労苦の跡や針供養  
咲き盛る小鉢の梅や違ひ棚  
洞穴は鳥のマンション梅香る

魚河岸の糶の符丁よ息白し  
古傷に触れず語らず爛酒を  
少年はパティシエ志望冬木の芽  
時計屋の針はてんでん余寒かな  
来たる世を透かしてみたし薄氷

曙 光 五明 昇

金 縷 梅 椎野 美代子

雪吊に加賀宰相の心ばせ  
雪催舷灯揺らぐ船溜り  
水桶に鯉の静もる寒厨  
大願へ白息続く女坂  
壁掛に旅を待ちゐる冬帽子

金縷梅や白となる樹がねかされて  
金縷梅の畑中抜けて蝶となれ  
金縷梅にハズキルーペを用ひもす  
金縷梅日和五体のどこかねむたくて  
金縷梅や金の茶釜を資料館

二 月 島津初花

初雪をたちまち溶かす日差しかな  
左手の杖は身の内木は芽吹く  
二ヶ月の窓に夕映え眩しめり  
早咲きの梅の香くぐり外泊す  
下萌や雲浜像のお足元

追儼の夜 鈴木康世

峰に斯く朱き月あり鬼やらひ  
節分や見え隠れする為人  
鬼やらひ良く通る声聞を飛ぶ  
節分のまだあたたかき豆を噛む  
小半ら酒酌み父の忌の梅を愛づ

寒 永野史代

あの人このひと寒中見舞書きながら  
冬苺小さく抱きて見舞ひけり  
らあめん啜るをとこ鰯の寒厨  
電線を統べりゆくのは雪女郎  
春の水浅間のふもとより出づる

余 寒 西山貴美子

筋力を少し抜きたる二月の木  
人形焼の顔に傷ある余寒かな  
生傷の絶えぬ余生や日脚伸ぶ  
ふきのたう鳩の地声に誘はれて  
紙袋ころりと吹かれ露の臺

春 浅 し 波多野 寿子

呼びかけてくる早春のせせらぎよ  
今日は今日生きよと言ふ娘春立ちぬ  
豆打ちて一人住まひをにぎやかに  
浅春の部屋にみちたるノクターン  
さんさんと降れど積らぬ春の雪

減り張り 星野 和葉

立春や旅の案内に気負ひ立つ  
立春や一瞬光り鳥よぎる  
表具師の指にめりはり二月かな  
雨水かな緩み加減の天井画  
文字ぐるぐる言葉ぐるぐるして雨水

ほどほどの 茂木 和子

寒夕焼照葉樹の蔭いと深し  
ほどほどの土の湿りや春しぐれ  
夜を濃くシヨパンの曲や春の雨  
ハーネスの手応へ確と春時雨  
春暁や土にも親し盲導犬

春の風邪 矢作 水尾

天井の木目裸婦めく春の風邪  
鮫小紋縫うて感謝の針供養  
研ぎあげし刃物の並ぶ余寒かな  
オペラグラスに主役引き寄せ初芝居  
航跡も末広がりぞ初日の出



忌を迎ふ 山中順子

春の猫 由良ゆら女

一枚の空斜に唸るいかのぼり  
巻きぐせの残る余寒の刷り仏  
指折りて数ふ余寒の忌を迎ふ  
万象の芽の膨らんでくる雨水  
絵馬に願ふこと幾度ぞ梅の宮

稜線を突きぬけ空に梅の花  
猫つ毛は母親ゆづり柳の芽  
ソプラノにバスとテノール春の猫  
わが声に恍惚として猫交る  
恋猫につれなき様の主かな

二月尽 山中みどり

煎薬 吉住光弥

薄荷糖の角柔らかし春の雨  
茹で上げし菜の花白磁の浅皿に  
何もかも中途半端に二月尽  
花辛夷低き家並の佃島  
北斎の厄病退治図うらけし

薄氷やちちはは遠くとほくなり  
薄氷踏む少年快と虚しさと  
花金縷梅へらへら野性インコ群れ  
春時雨疼きも京の竹林の道  
煎薬が効くと云はれて春時雨

半濁音 網野月を

薄氷や半濁音に割れてみる  
 春の雪失くしたはずの宝くじ  
 雷神の遠眼差しや春の色  
 老残を踏み従へる蘆の角  
 鮫肌にとこの色気やぶ椿

(順送り)

☆ ☆

# 俳句

4月号  
 予告

3月25日発売  
 予価(本体864円+税)

特別作品 有馬朗人・奥坂まや・中原道夫

## 入選の鉄則10カ条

## 俳句再入門

### 大特集

- ① リズムを整える  
 柏原眠雨
- ② 季語を使いこなす  
 涼野海音
- ③ 句材の選び方  
 土肥あき子
- ④ 文体と表記  
 河原地英武
- ⑤ 完成度を高める「切れ」  
 原雅子
- ⑥ 文法の誤用に要注意  
 小山玄黙
- ⑦ 推敲の考え方  
 生駒大祐
- ⑧ 取合わせと一物仕立て  
 宮本佳世乃
- ⑨ 類想句の避け方  
 安田豆作
- ⑩ 自選力を鍛える  
 遠藤由樹子

## 俳人協会各賞決定!

受賞のことは  
 受賞第一作ほか

新連載

名句水先案内……………小川軽舟

新メンバー!

風土吟詠 都道府県四十七人集

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <https://www.kadokawa.co.jp/>

# 季音月

生ぐさし 荒井俱子

寒の明声光だす庭雀  
寒明の空に切り込む竹とんぼ  
棘抜きし指の疼きや牙返る  
自販機にことりと硬貨牙返る  
恋猫の行き交ふ路地の生ぐさし

男坂 高島寛治

手の荒れし母を促す初湯かな  
薄氷に遊魚の匂ひ残りをり  
鶯餅大書滴る手漉き和紙  
春寒や支根剥き出すローム層  
男坂白梅の香の駆け上がる

遠山火 十倉和子

塗り立ての回転木馬春浅し  
強東風の抉りゆきたる魚鼓の腹  
丈六の玉眼光る遠山火  
春の猫四五匹はるて庵主留守  
横丁へ逸れて恋猫三つ巴

御伽草子 柚木治子

下萌えて御伽草子のやうな里  
下萌や制服合はす六年生  
延命か否か迫らる寒き春  
近づけば炎にあらず紅椿  
虚あれど姿勢くづさぬ梅一輪

上州路 松本光子

おでん鍋湯気の向かうに銀座あり  
春浅し小暗き路地の銀座裏  
公魚を辛口に煮て江戸言葉  
骨董市ラシャの冬帽懐かしき  
風花や駒留め残る上州路

ぬかるみ 小倉 倭子

産土の宮の柄杓に春の水  
洗面の微光を掬ひ春の水  
泥濘の一つ跳びうれし春の水  
肘を付く出窓の少女春の風邪  
幼子の眼に憂ひ春の風邪

山笑ふ 森田 祥絵

徘徊の人見守る人に梅ひらく  
年の豆心にうちて八十路なる  
飾り窓に目の無い達磨春寒し  
恙無き吾が晩年の春シヨール  
スタツカートの鳩の地歩き山笑ふ

早春 田寺 玲子

春立つや少女の巻毛風にゆれ  
抽斗に聖書一冊猫の恋  
海光を返す海苔粗朶瀬戸平ら  
パレットへ早春の色盛り上げて  
料峭のテトラポッドを釣り場とす

送水会 鳥羽 和風

青竹の筒に香水梅匂ふ  
鶉の瀬へと千の松明春の月  
大護摩の火の粉溢れて春の星  
法螺の音が鶉の瀬を包む送水会  
春の川きらきら注ぐ御香水

伊勢参り 宇田 白鷺

虎さんに会ふかも知れず伊勢参り  
伊勢参りハートの小石見つけたり  
神おはす宮へ玉砂利踏みしめて  
宇治橋や擬宝珠さすれば風光る  
「赤福」を買ふ行列も伊勢参り

春北斗 藤澤 喜久

咲き満ちし紅梅醸す微酔かな  
ライラック汽笛きこゆる唄酒場  
紅椿濡れし口唇ジャズ喫茶  
風からむ梢こまやか春北斗  
ノムさんの遺せし「金言」涅槃西風

長閑なり

池田雅夫

開け放つ窓 三月の日射しかな  
山笑ふ 馴染みの深き 国訛  
ひもすがら 趣味に没頭 長閑なり  
づかづかとぬかるみをゆく 老耕牛  
核家族 同士うち 解け野に遊ぶ

草おぼろ

井上燈女

補聴器の兄も混ざりて 野焼かな  
しとどに濡るる 雨が育む 焼野かな  
春泥や 轍を残し 田の乾き  
野地蔵のまぶた 重たき 草おぼろ  
春浅し 生みたて 卵集むる子

デカルト忌

渡辺舍人

熱爛や びばりは 唄に 泪溜め  
泪は溜めぬ AI びばり 河豚身酒  
畳屋の 機械の 針よ 針 供養  
春立てり 人に 思 春期 適 齡 期  
吾唱ふゆゑに 汝れ在り デカルト忌

風の遊び

丸山 マスミ

金縷梅や 三年ぶりの 嫁御寮  
薄氷に 風の遊びか 幾何模様  
天に 吠え地を 這ふ 焰野焼かな  
野火 猛る 強制 廃村 ありし 地に  
水切りの 石の きららや 猫柳

草青む

森本 早苗

山笑ふ コロナ ウイルス 蹴散らして  
草青む 散歩 半ばの フラダンス  
囀やよき アイディアを 漏すまじ  
急カーブ 多き 電鉄 春の 靄  
白梅の 一枝 添ふる 仏花 かな

梅林

加藤 むら子

昔来た その 梅林の 様 変り  
梅古木 峽の シンボル 一軒家  
行き 摩りに 貫ひし 青菜 春日 受け  
薄氷に 釣人を はず 日の 跳ぬる  
小流に 添ひたる 斜面 露の 臺

鎮座

町野 広子

七草の二種は庭へと摘みに出る  
寒厨樽より上ぐる香の物  
研ぎ終へし包丁眠る寒厨  
大甕のでんと鎮座の寒厨  
雪吊の始まる前に振舞酒

下 萌

井関 礼子

紛れなき空山の容春立てり  
里道は暮らし道なり下萌ゆる  
天神の梅の蕾の日を追ひて  
自重てふ自認をつねに春寒し  
針供養時代を映すトッピング

春の来て

内田 恵子

鳩時計飛び出したまま春炬燵  
車窓より見ゆる貝塚春時雨  
築山に男松と女松 蜆汁  
薄水や濁り始むる水晶体  
上履きの踵踏みつけ卒業す

冬の海

白井 由美

鳥点灯手繰り寄せたき冬の海  
山盛りの白魚井や海の店  
二ん月の大夕焼に富士聳てり  
犬一匹通らぬ朝の寒戻り  
鬼は外豆打つ寺の子等忙し

梅

川崎 道子

狛犬の鼻孔ふくらむ梅の花  
つぎつぎ伸ぶるパイプの足場梅の東風  
芝焼いて紅茶に檸檬しぼりきる  
春北風怖づ怖づ渡る沈下橋  
猫の恋寝不足の吾も嗶れ声

寒 卵

伊藤 敦子

地を踏んできれいな素足寒雀  
寒卵立ちしひと日をよるこびぬ  
福の豆撒きて拾ふも吾れひとり  
如月忌どこかで水の弾く音  
ペダル漕ぐ肩のいかりや冴返る

殺生 霜中冬至

主治医とのよもやま話雨水来る  
冷やめしをおじやに仕立て男めし  
雑炊のこげ飯にある昭和の日  
左遷と云ふ人事もありて桜東風  
殺生を許しておくれ目刺焼く

春光 川野妙子

春服のひらひらスカート幼子よ  
花の下膝にひろぐる茶巾鯨  
鳥の来てゆらゆら花と遊びをり  
春光を乗せ走り去る新車かな  
春一番髪逆立てて家路かな

春の霜 岡野順子

春の霜庭の一隅野菜畑  
春の霜光りてぐさり身の内に  
春の霜さらりきらりと語りかな  
この地球大地くほませ豆を播く  
節分や香り楽しみ福茶飲む

【特集】二号連続企画

風土を詠む

後編

47都道府県を詠んだ秀句を収録

●巻頭三句

小原啄葉

波戸岡旭

名村早智子

吉岡乱水

秋葉舟生

和田順子

●今月の華

長浜 勤

浅井民子

●俳句と短歌の10作競詠

堀本裕樹

永田 淳

●その時、俳句手帳

鹿又英一

●好評連載

筑紫磐井

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

藤村公洋

俳句のつまみ

二ノ宮一雄

一望百里

神作研一氏 新連載!

国文学研究資料館教授

俳句四季

Haiku Shiki

2020年4月号

3月20日発売  
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/>

東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180



# 季音花

春近し 井上玲子

薄氷や丹の橋に寄る鯉の影  
 びしぴしと薄氷踏んで童心に  
 海鳴りや薄氷解けぬ潮溜り  
 猫柳活けて水辺の風を呼ぶ  
 溪流の水照りに燦と猫柳

老梅 松井由紀子

春立つや語りたきこと零れ出づ  
 春寒し雲なき空の底光り  
 足跡に杖の跡添ふ春の土  
 老梅咲く古楽の序章唱ふがに  
 老梅の凜と季を告ぐ花一輪

春時雨 梅澤佐江

生菓子の彩きはやかに春隣  
 春の燭ゆらぐや平家琵琶佳境  
 小町糸とほせしままの針供養  
 待ち合はす春の時雨の二月堂  
 簞を風そよぐやに春時雨

北風 秋山冷子

竹林は勝者の叫び北風  
 人肌の温みほしくて冬の蠅  
 古杖は父の履歴書建国日  
 あのあたり賢所ぞ寒鳥  
 地球半周忘れた頃に賀状くる

折詰 矢島清

近寄れば牛も近づく春日和  
 沼と言ふ大き鏡や帰る雁  
 折詰に小さき醤油や菜飯食ふ  
 芽柳の上を流るる風の綺羅  
 風を受け風に躡く恋の猫

爪 革

福田千春

ちぐはぐな別れ春雪降りやまず  
春雪やかはいい嘘をつくをんな  
爪革の緋色に溶くる春の雪  
春の日に光れるものはみな光り  
月ごとの母の見舞ひや山笑ふ

弥 勒 仏

大場順子

湾一枚鏡の如し初景色  
一の矢を空へつがふる初山河  
初春や金糸銀糸の手組み紐  
亀甲の罅は吉兆鏡餅  
春を呼ぶ指しなやかに弥勒仏

下 萌

森川義子

川なりに曲がる小径や下萌ゆる  
暈より夜がきてをり余寒かな  
打つ釘の曲り苛立つ余寒かな  
微笑みて無言の会釈春の昼  
触診の医師の眩き春の風邪

余 寒

山田美佐尾

余寒かな白を極むる天守閣  
絶筆の城主の筆に余寒かな  
茶を点つる袱紗捌きも余寒かな  
水仙のその一本は剣のごと  
きり岸の水仙海へ迫り出せり

上弦の月

原田想子

如月の上弦の月刃を研ぐる  
くつきりと吾が足跡の雪一寸  
庭先に風こそばゆき芽吹きかな  
きさらぎや樹は枝々のこぶし上げ  
閉めしまま光愛でるや春障子

下 萌 え

松宮保人

追ひ焚きの長風呂となる冬の夜  
長編のドラマ<sup>堪</sup><sup>堀</sup>や夜半の冬  
下萌や大地目覚めてゐるあかし  
良縁の話し膨む猫柳  
鎌一丁研ぎ仕上げたる雨水かな

猫の恋 宮崎雅訓

春雲とふはりを競ふ飛行船  
老夫妻は犬と散歩や春の朝  
施設から故郷を見れば山笑ふ  
薄氷や踏む女兒踏まぬ男兒居て  
階段をびゆんびゆんびゆんと猫の恋

竹林 野口和子

ピザ窯の炎のどけし茶房かな  
読み返す「暮らしの手帖」冬座敷  
冴え返るドクターヘリの音近し  
如月や竹林ぼんと音放つ  
冬の空土地の相続放棄せり

猫柳 野平美紗子

旅靴置くフロントの猫柳  
ふる里の蝦住む川辺猫柳  
光り合ふ川面と銀の猫柳  
地のものの皆動き出す春の土  
陽光を鋤き込み匂ふ春の土

水の春 菅原知子

春月冴えて雨戸一枚残しおく  
補聴器に忍び泣きあり雪女郎  
雪女郎消えて残るは紅もみの赤  
ていねいに庖丁研ぐや水の春  
春の水ちよろちよろがさらさら

息白し 井口俊晴

初稽古大上段に気合込め  
春雪やか細き仮名が宙を舞ふ  
駆け抜くるピンクのシューズ息白し  
ストックをいちにいちにと息白し  
春浅し舟べり叩く波の音

満開の梅 中野 疆

豆を撒く福は明日の朝にくる  
豆撒きや鬼とは自分かも知れぬ  
満開の梅に安堵の朝の窓  
湯豆腐をすくへば夜の傾きぬ  
公園へ誘ふ葉牡丹整列す

春火鉢

上戸 千津子

半世紀の記憶戻すや春火鉢  
飛び石を縁取りしつつ下萌ゆる  
雑木山古き巢箱がぼつねんと  
畦を焼く煙まみれの男衆  
紛らはし声を武器とし恋の猫

歩幅

松山清子

金網の向かうあまたの露の臺  
日脚伸ぶ歩幅を広く外に出づ  
眼福の北斎漫画長閑なり  
高きより梅百態の見ゆる園  
春雷や刺身の烏賊の足動く

春のばら

後藤綾子

木の芽吹き灰かに色づく並木道  
若人の華やぐロビー春のばら  
煩惱を捨てるは難し梅真白  
一陣の風に靡きて野火はしる  
棚引きし紫煙薄れて野焼果つ

枯れ山

西浦千枝子

自慢げに葉見せ合ふ建国日  
枯れ山へ杣木つつん幾何模様  
旧道は番傘の幅水仙花  
殿を走る曾孫や梅の花  
新築の続く奥より孕み猫

☆

☆

# 現代俳句鑑賞

## 網野月を

月を待つ春の空かな誕生日  
腿で手をぬくめながらや枯野の椅子

池田 澄子

〔俳句〕2月号・口紅より〕

確か作者のお誕生日は三月であったと記憶している。であるから前句の「誕生日」はご自身のお誕生日であろう。月の出を待つのは人間ばかりでなく、春の空もまた待っているのだと、作者は言っている。「月」は秋の季語として固定しているのだが、こうして見ると春季にもある種の趣を以て愛でられてしかるべきだと、作者は考えているのかも知れない。次句は作者ならではの発見が叙してある。作者は日常に埋没しがちな人間の行為に光を当てて句として紡ぎ出す名人である。

両句ともに中七に切れ字を使用している。前句は座五に時間を、次句は座五に空間を配置して、中七の切れ字をしつかりと受け止めている。

他に「風のない午後を萩とかせとか」「厚着暑し陸軍監視所跡に立つとき」がある。これらの句は昨年秋に十数人で大島へ吟行旅行した際の作句であろう。筆者もご一緒させていただいた。一句は確か三原山の麓の食堂で、もう一句は波浮港の東側に位置する鉄砲場周辺での作句であろうと思われる。

息しづか漁火の無き冬の海

吉永 興子

〔俳句〕2月号・降誕祭より〕

自らの息づかいに気づいたのであるうか。「冬の海」に灯火の無いことを確認しつつ、自らの息づかいも確認したのである。そう考えると、時間の経過からすれば、中七座五から上五に戻る順序になる。しかしながら心を打った強さはこの順序なのである。読み手もこの順序で作者の言わんとするところを読み捉えなくてはならないということになる。

埋蔵の証よ庭の実千両

島村 正

〔俳句四季〕2月号・仙人の草鞋より〕

ことば遊びの延長で解釈すると、「埋蔵」と「実千両」がついてしまうようだが、「実千両」の色合いに昔埋めたかも知れないタイムカプセルか？宝箱か？を考えてしまうのである。そうすると「埋蔵」という措辞からも子どもの頃に思い描いたロマンを引き出せるようだ。

この世をばふいと暇の寒鴉

新村 草仙

〔俳句四季〕2月号・寒鴉より〕

八句の連作で、老いや人間の生をテーマに叙している。諦念の句かと初めは読み進めたが、やがて達観の句意であるこ

とに気が付いた。つまり茶化したところが無く、客観的な手法で作句されているからなのである。掲句は「寒鴉」に擬えてはいるが、「寒鴉」に投影された死生観が「ふいと暇の」に野太く描かれている。この作者の中では此岸と彼岸は、しっかりと繋がっているようだ。

### 戦没者墓地にびつしり霜柱

次井 義泰

〔俳句界〕2月号・和泉野より

テーマが固まっているし、叙し方も無駄を削ぎ落としたやり方で、読後には名刀でバツサリやられた感じがした。どうしてこのような句が出来るのかというと、それは静かに対象を見詰めているからこそその叙景なのでろう。

### 大堰は山々豊かなる野分

落合 水尾

〔俳句界〕2月号・利根の鷹より

匠巻の三十句が並んでいる特別作品「利根の鷹」中の一句である。大堰は利根大堰であらう。あの雄観は見たものを放さない景である。武蔵水路へ回す水量の豊かさを「山々豊かなる」と叙している。そして、「野分」の時期に一層の水量を見せているのだらう。怖いほどの景であらうと思われるが作者の眼からは「豊かなる」となるのである。他に「青空を飛び出て見えず利根の鷹」「一病は流れ去るべし冬たんぼほ」「夕焚火野辺の雑多をあつめたり」がある。

### 風花やまたもひとひら追ひつきて

合谷美智子

〔俳壇〕2月号・無為より

題「無為」のとおり難解さは無いのだが、実に深い世界を捉えて描き出している。纏まった十句はそれぞれが独立しているのだが、弾力のある質感は通うものがある。掲句は上五の季語「風花」の景を叙しているのだが、「風花」同士のようにも読めるし、また何か別のものに「追ひつ」いたようにも読める。座五の「……て」を軽い切れを感じながら読むと良いのかも知れない。

### カフェオレの皴ざつと混ぜ雪くるか

浅川 芳直

〔俳壇〕2月号・息より

「混ぜ」る作者の動作と「くるか」の作者の予知との並列が緊張感を生み出している。秀逸である。「カフェオレの皴」という素材の質感の何と新鮮なことか！作意の無いところも好感度抜群である。作者の紹介欄を見ると平成生まれの方である。それにしても熟達されている。

### 手のひらで月を押しゆく踊りかな

山本 則男

〔句集〕『補陀落』より

『補陀落』は作者の第三句集で、平成二十四年からの作品四五〇句を収めている。作年毎にまとめられ、題が付されている。掲句は平成二十五年「円相」の中の一句である。盆踊りの景であらう。踊り手の手つきを「月を押しゆく」と表現している。一つ一つの動作（動き）に意味付けし、または踏み込んだ表現を用いて、動作（動き）に表情を付加しているようだ。他に「山焼く火風を啞へて走り出す」「風船の中の過去なら知つてゐる」がある。

山本鬼之介 選

水明集

簞笥の奥に父の表札雪蛸  
一葉の肩を揉みたし冬柳  
凧や北の漁場の難破船  
手探りで灯す蠟燭近松忌  
初雪や野猿の憩ふ露天風呂

日脚伸び舟の影曳く佃島  
臘梅の香に癒さるる会議室  
臘梅や香り分け合ふ老夫婦  
薬剤師の白衣の折目冬深し  
喜びも重ね供ふる鏡餅

さいたま 保坂 翔太

川口 野田 静香

妻の仕草ふつと彼の夜の雪女郎  
半身は生身であらむ雪女郎  
蘊蓄に飽く一月の酒宴かな  
人日や列なして観る「ミイラ展」  
古漬を添へて朝の七日粥

横浜 正木 萬蝶

すそわけの若水もちて珈琲淹る  
元日を風雅に過す侘住ひ  
読初は歳時記づくめ五七五  
出囃子の音一月の六区街  
片隅に赤く咲きたる冬薔薇

草加 河野はるみ

目が覚めて夢の彼方へ宝船  
初夢にマンモス出たぞチバニアン  
笑はせてなぜか悲しき猿廻し  
初山河マウスで描く招き猫  
初御空この青汚されぬやうに

さいたま 日高 徹

初壳や鼠模るパン並ぶ  
一匙に七草の味朝の粥  
古墳より見渡す町や寒日和  
寒紅や鏡の中に違ふ顔  
初場所の大逆転の涙かな

熊谷 越田 栄子



読初は書棚の中の風雲児  
読初やドラマ仕立てのトップ記事  
深追ひせぬは武士の情よ懐手  
初場所や櫓太鼓の撥が呼ぶ  
赤鼻を外し道化師おでん酒

行田 近藤 徹平

者癡や昨夜の夢の溶け初むる  
寒紅の美しき女の筆柔し  
寒林に懸かる梢に昼の月  
いささかの悔いはさらりと小豆粥  
空を切る手先鮮やか初かるた

鴻巣 大塚 茂子

吾が影の動きし光の冬童  
不揃ひの淑気の集ふ丸き卓  
二枚刃の剃刀の傷鏡餅  
鍛錬の一打の冴えや福寿草  
探梅や日の出を待たぬ旅仕度

さいたま 青木 鶴城

百折を耐へて芳し水仙花  
髪束ねきりり弓引く寒稽古  
吾が村に童少年し寒雀  
底冷や鞆に搜す家の鍵  
六文銭の城址に深く風花す

さいたま 染谷 正信

松過ぎやあやかりたきは涅槃仏  
風花を追ふや園児のベレー帽  
越中の葉売りきて雪催  
蠟梅の気付かれぬやう気付くやう  
葉指あけて十年春隣

渋谷きいち

妻としてしきたり古りし七日粥  
初詣幸をみくじに需めけり  
御仏の口に引きたや寒紅を  
初場所の歓喜の渦のひしめけり  
拌み来し初日の彩をまなうらに

熊谷 神田 治江

冬の霧口のほぐれぬバスガイド  
鳥影の怪鳥めくや冬日中  
口口に時の早さを年忘  
お年玉千代紙で折るぼち袋  
高峰を畏み鳴るや鯰起し

曲淵 徹雄

神仏に祈る息災明の春  
初年や水に若やく岸の草  
婿殿の切りし伸し餅初明り  
語らひて風去る如き年始客  
自転車をはたすら漕ぐや北風の街

さいたま 宮崎チアキ

初場所や華やぎ添ふる綺麗所  
豪快に伯方塩撒く初相撲  
初場所や元結きりり揃ひ踏み  
波形に箒目つけて寒日和  
齋打つ真白き母の割烹着

高崎 原田 秀子

ほどほどを願ひ小ぶりの注連飾  
マラソンの胴上げ淑気の満つる空  
裏白のちぢれ具合のめでたさよ  
体重計にこはごはと乗る三日  
先人の知恵をつくづく七日粥

さいたま 熊倉千重子

三十三山の母なる胸の初御空  
摩り切れし句帖に燃ゆる初句会  
今年まだやれさうな気が初雀  
着る事の無きや春着を吊し見る  
逃げて行く東子追ひかけ春の水

若狭 飛永 鼓

朝の歩に富士の近づく初景色  
黒豆の漆黒の艶淑気満つ  
淑気満つワイングラスに松一枝  
氏神に豊穰の旗淑気みつ  
初釜や金継ぎ碗の謂れ聞く

下川 光子

幼児の肌つややかや鏡餅  
若水にアルプスの水求めけり  
地震の跡のこる原野の若菜摘む  
成木責鈍を翳すは今も兄  
放牧の牛あたふたと枯野行く

さいたま 加藤でん治

鴨遊ぶ底まで澄みし湧水池  
華やげる大葉牡丹を根締めとす  
初映画人情話に笑ひ泣き  
穏やかに笑む石地藏福寿草  
福寿草夫婦つましく暮らす家

東京 太田 絹映

風花や新たに文字を兄の墓  
寒鮒や光る鱗の眩しさよ  
日脚伸ぶ少しスリムに影法師  
蠟梅にみくじを結び良き日待つ  
蠟梅の香る茶室や三分咲き

新 曆文

庭園に獅子舞ふ囃子三日晴れ  
庭園の船屋傾ぎて松の内  
取り敢へず義歯を外して餅を食む  
鏡餅箆の上鎮座して  
都会には挨拶程の雪が舞ふ

さいたま 田中 章嘉

湖の彼方に富士を拝み初御空  
両隅で舞台に華を寒牡丹  
友思ふ郷土かるたを読みをれば  
手と足の指で握手の初湯かな  
餅花や里の煤けし太柱

さいたま 斎藤 みよ

凍蝶の風に遊ばれ庭の隅  
祈る背にステンドグラスの映る冬  
微動だにせず一塊の冬の蜂  
捨て畑に雄々しく群るる水仙花  
葉牡丹の眠り居るよな真昼かな

伊予 向井 章子

初鏡まだふんばれと紅を差す  
金箔の浮ぶ地酒を屠蘇がはり  
餅花や加賀の出店の酒試飲  
一札し受講子塾へ初御空  
牧童の放つ口笛春隣

橋本 京子

元朝や此処から富士が見えるはず  
先づ父母の忌日を記す初曆  
ぶつぶつと母の繰り言実千両  
失念し八日に食す七日粥  
雪女郎の笑む踏切の向かう側

東京 石川 理恵

碧き海へ意志それぞれに水仙花  
探梅の枝垂れの先に屈み込む  
路地奥の手押しポンプの水冴ゆる  
灯の冴ゆる離れ座敷のシャンデリア  
稜線を赤くなぞりて冬入り日

川崎 鈴木 玲子

花一枝床に活き活き年送る  
頬被して赤城おろしを迎へ撃つ  
高鳴きの切りさく空や年流る  
年が行く地の静けさや雀二羽  
葱畑天を突き差す畝走り

さいたま 秋本カズ子

数へたる吾の煩惱大旦  
階上の部屋騒しき今朝の春  
繰りたれば父の句出づる初曆  
血のぬくき義母の手を引く松の明  
新雪が小雨に変はる誕生日

平塚 丸屋 詠子

スカイツリーを写す大川都鳥  
千両に夕日の残る古刹かな  
手捻りの益子の壺に実千両  
大水柱楽器のやうに鳴らしをり  
山男グラスに氷柱折り入れて

笹本 啓子

初笑ひ茶の間に揃ふ四世代  
お年玉開けずに部屋へ駆け戻る  
松過ぎや我が身の籠を締め直し  
風花や天女降りくる兆しかも  
チバニアンてふ地球史や冬銀河

上尾 横山 君夫

生垣を刈る音絶えて年送る  
湯豆腐の湯気に夕餉の和むかな  
松過ぎて迎へし年をしみじみと  
初日の出喚声上がるその光  
風花や漁港かすみて声高し

さいたま 塩野 久子

寒晴や滑翔つづく田園地  
夜道漂ふ臘梅の香や母徳ぶ  
冬の山道色鮮やかな人の列  
初夢や山里を飛ぶ鳥になり  
初場所や打ち囃ます魂どよむ衆

さいたま 西幅 公子

簞えたる石段数へ初参り  
鉛筆の削り香ほのと初句会  
ぢぢ宛のひらがな大き年賀状  
ひつそりと遠慮がちな冬菫  
寒木やその枝ぶりは杜の主

秋山 紅花

一月の華やぎまとひ美術展  
一月は抱負次々メモ埋まる  
一月や喪中の友に会ひに行く  
冴ゆる夜の三昧の聞こゆる神楽坂  
天井に黒い染みあり冬の蠅

東京 石田 慶子

初御空移り住むべき町晴れて  
試歩の背へ声援とどく寒椿  
パン屑へ藪抜けてくる寒雀  
迎春花人なき庭の地へ池へ  
春暁の寒き肩より目覚めけり

横浜 山岸 弘子

学童の 一列歩行冬田道  
一身に朝日浴びるや初御空  
親元へ夫と挨拶春小袖  
ちんまりと老女ばかりの初句会  
老いどちの陽気弾くる初句会

若狭 山崎 郁子

シルエットのあの人誰か夢始  
実万両愚直に生きて卒寿かな  
人は百年万両しづかに実をつけて  
大寒や削る鉛筆リズムミカル  
大寒の無口ますます無口なり

さいたま 高橋 敏子

着膨れてぼんやり歩く銀座かな

さいたま 水野 興二

北風に背中おされて胃の検査

初空や両手を挙げて深呼吸

さいたま 川村 治

信楽の狸と遊ぶ落葉かな

温もりを包みてたたむ春日傘

西暦に未だ馴染めず霜柱

野仏に供花の如くに野水仙

為すべきことの忘れがちなる去年今年

帰り道残月あはく西へ消ゆ

七日正月抱き上げし児の泣き止まず

福田 育子

杉戸 佐々木史女

初夢や七賢梟現るる

災害のなきこと祈る初日かな

実万両自慢の赤きネックレス

健診の結果気になる三が日

静かさや日を背に受けて女正月

仮名の和歌書く半切や初硯

狭庭なれど重ねし月日実万両

喪中正月晩鐘の音耳障り

羽根を休むる鳥のみやげの実千両

梅澤 輝翠

さいたま 山口 韶子

聞こえくる土押し上ぐる霜柱

夜毎濡れいま透き通り冬童

ぼつぺんは小樽の人のみやげもの

寒林に音響かせて犬と吾

ぼつぺんのぼこぺこばこと道すがら

からからに組板乾き女正月

寒波来ぬ白波立てて日本海

松過ぎの空き間嬉しき冷蔵庫

美しき巫女に見とれて破魔矢受く

高原 和子

新井 孝磨

破魔弓や一人息子も親となり

極太の母の手編みの冬帽子

空青く通り静かに淑気満つ

湯豆腐や二人家族の外は雨

屋上に登れば富士の淑気かな

風花の一つひやく襟元に

茶を点つる友の姿や淑気満つ

鶉色の春着の衣桁光差す

るんると術後の裸眼梅探る  
探梅や膝の痛さも忘れをり  
鏡餅に一念発起二郎君  
鏡餅家族旅行の留守をする  
探梅や杖を頼りにあの森へ

さいたま 藤岡真知子

裸木の幾何学模様空に映ゆ  
欄干の風に真向ふ都鳥  
遊覧船の右に左にゆりかもめ  
杭といふ杭を占領ゆりかもめ  
子の耳朶のうす紅色やゆりかもめ

さいたま 森 和子

秩父峰の夕日に染まる枯木立  
橋脚の壊れしままに白鳥来  
束の間に金柑鳥の餌となりぬ  
手料理を持ち寄る姉妹小正月  
初空に打ち合ふ親子バドミントン

蕨 細井 良子

初場所の響く太鼓と幟旗  
初場所や小兵の勝ちにどよめけり  
川底に動くものなし寒日和  
久に炊くめでたき色の小豆粥  
祖父らしくその朝に逝く寒の晴

東京 鈴木 和子

赤城より望む故郷の初景色  
初詣一日だけの信者かな  
佗助や謙虚に生きし父母の背  
枯葉舞ふイヴ・モンタンの歌につれ  
埋火や胸に秘めたる志

さいたま 反町 修

初御空皇居に日の丸はためきて  
五輪まで生きて若水歳神へ  
初雀空へ義足の大ジャンプ  
数の子ややん衆舟の波唸る  
道づれと有為の山越え三日かな

小浜 松島 寛久

寒晴や駅伝たすき揺るる道  
冬晴や変つく顔の磨崖仏  
田んぼあと村で手作りスケート場  
いかるがの尼寺を彩る実千両  
磨崖仏の径をたどれば実千両

竹澤 和子

鉢巻にはさむ万札達磨市  
破魔矢受く氷川参道人の波  
水仙や若き尼僧の京なまり  
胸に抱く破魔矢の鈴の音やさし  
白菜のスープ仕立てのkok旨み

さいたま 田中 泰子

帰国すぐお節を作る母と成り  
笑ひ声重なりあひて去年今年  
初旅や我が家拠点に子ら動く  
初富士や三代並び起点とす  
曾孫の順に代はりて初電話

さいたま 山戸 美子

初春や赤子来たとして総立ちに  
初詣の列の長さや団子食ぶ  
あのそのと話進まぬ初笑  
音たてて寒禽餌の争奪戦  
藁苞の守る雅の寒牡丹

横浜 川島 典虎

己がため薄化粧して老の春  
どの船も動かぬ心配冬の川  
「悲愴」弾くその手沢庵漬け上手  
若水と云ふも電化の湯を汲めり  
初詣格抜きさんづる一宮

いすみ 平石 睦子

鳩達は何処へ行つたか初詣  
アルミ貨ほどの御利益願ひ初詣  
七草の五草育む多摩の谷戸  
はやし唄むにやむにやむにやと薙打つ  
七種の粥飽食の喉を焼く

町田 瀬戸雄二郎

葛折越えて湖畔の寒の宮  
枕辺に一箋残し避寒宿  
ラッセル車土塊となる骸かな  
裏返る犬の遠吠え寒月光  
闇汁に白き泡あぶくの留処なし

さいたま 大槻 瑤蘭

磨かれし香炉の重き寒句会  
神饌のひとつに文旦光りをり  
大白鳥園児指さし保母にきく  
人吞んで人吐く公園寒最中  
温度計そなへ鳥籠寒に入る

さいたま 伊藤 愛子

山裾にほつほつ消ゆる冬灯  
小正月義理と人情少し欠き  
寒灯や煙る信号赤の点滅  
道なき道や令和二年の初明り  
戸を叩く道に迷ひし雪女

飯田 忠男

パンドラの箱を開きて年新た  
天井裏に賀状のねずみ集りぬ  
十曲より選びしチャイム今朝の春  
雪不足にどつさどつさと掻き集む  
肥満児のスリムに変身流行風邪

和歌山 高橋満耶子

初詣似た者夫婦で忘れ物

新年や挨拶遠く川向かう

旧き友二人と祝ふ年酒かな

新年や雀喜ぶ飯のつぶ

年賀状一枚当り幸つかむ

和歌山 南條きわゑ

春日部 仲田 利子

五絃琵琶音色乗せたき小春風

凧や弥彦神社の夕日影

出世して鰯の味よし姿よし

鰯のあら煮やうか焼かうか舌に聞く

孫子等の集ひ弾ける初笑

初空や海の鳥居に潮満つる

初空は富岳抱きて朱に染む

蔵座敷餅花飾り賑賑し

餅花に歩き初めの児が触るる

裏街道餅花挿すも人気なし

さいたま 小川 洋子

さいたま 白田 みち

坂道を靴と格闘アイスバーン  
スケートに子供は慣れて母苦戦  
冬木ぬき縁に陽射しや猫丸く  
焼詣の赤旗なびき別腹に  
寒晴のケーキセットをカフエテラス

新年の顔にみなぎる子の決意

初鏡眼力強き吾がゐる

四日はや仮面を脱いでいつもの子

黒豆をそつと煮返す七日かな

女正月過ぎ日常をかみしむる

松田 朋子

吉川 杉浦 理恵

一月やりセットボタンぽんと押す

一月や老夫婦家のごみの高

若水や猫が先越し福を舐む

冬ばらを抱き飛び乗る夜汽車かな

歌舞伎町夜半に売らるる冬薔薇

子を護る親の姿や枯蓮

齢重ねおしやべりばかりの忘年会

要不要きつちりと分け年忘れ

忘年会昔の職場盛りあがり

子と孫と集まりうれし初笑ひ

東京 河原 叔子

栃木 佐々木典子

令和初参賀の声や御代の春  
まほらなる御濠に初日番鳥  
老いて尚筆跡麗し初便り  
昭和初期生れて令和よ千代の春  
松納め久しく大人の歌に触れ



畏みて御世うつりゆく除夜の鐘  
一病持ちし身の恙無し去年今年  
墨の香を灰かに添へて祝箸  
こだはりの青海苔香る雑煮碗  
風花や塔の揺らぎに立ち止まる

和歌山 宮井美恵子

三世代の正月尚も晴れやかに  
夕暮の木立ほんのり寒の月  
毀たれし家の寒木瓜夕日中  
散会し友と見上ぐる冬の星  
チャイコフスキー聴きつつ絵を描く冬の幸

宮代 関谷多美子

年忘れ第九で心洗はるる  
炎囲み歌声揃ふ聖夜かな  
慎ましく佳き日を祝ふ鰯の膳  
福を呼ぶ笑ひの連鎖初笑ひ  
年玉の袋大事に離さぬ児

春日部 諏訪サヨ子

シェーバーの音の軽やか初鏡  
橙をのせて小さき鏡餅  
良く喋る女礼者の国訛  
初御空郷の空へと飛行機雲  
買ひ初めはコンビニ弁当餅に飽き

東京 水落 守伊

出初式日食の陽を背に受けて  
不揃ひなマフラーの日や母編みし  
夕暮の道に迷へば寒椿  
再会の約束兼ねて寒見舞  
菰の中名は貴婦人の寒牡丹

草加 外村 紀子

ウィッグの外れかけそな春一番  
山茶花の皆満開の家路かな  
こつそりとチキンラーメン三が日  
山茶花や古き詩集のかをりかな  
足首より忍び込みたる寒気かな

大阪 飯塚智恵子

初夢は世界一周船の旅  
冬の夜や酒の肴に昭和歌  
寒晴や浅草歌舞伎いそいそと  
口ぐせは道具が大事雪見酒  
新春に懐妊聞きて拍手せり

さいたま 野村 美子

神鏡のしろがね光り淑気満つ  
ほほ笑むごと一ひら開く冬薔薇  
うち揃ひ大鍋かこむ今日の春  
読初は信濃のひねくれ一茶集

さいたま 櫻井よし江

年賀状から飛び出しさうなねずみ  
初夢の瞬時に失せてつづきなし  
静かなり素顔のままのお元日  
掃納めペランダ広くなりにつけり

東京 柳父 はる

列島の事情包むや初御空  
岬まで春の渚の見え隠れ  
リズム良きオール捌きや春の湖  
言葉付き変へて嬬やか春着の子

若狭 岡本 祥子

陽だまりをさがして一歩寒の入り  
日脚伸ぶ空さるるベンチ余白めく  
遥かなる初東雲に残る星  
百二歳美しき戒名山眠る

さいたま 小山 敦子

冬晴や尖がる頂き八ヶ岳  
冬晴や長き白壁武家屋敷  
冬晴や居間整へて客を待つ  
七草粥炊きていつもの日々戻る

東京 飯室 夏江

なのはなやひよこのあゆみおぼつかぬ  
ふらここの遠く近くに母あらむ  
初蝶は風紋をなではてにけり  
柿若葉へ吹く風なら眠くなり

所沢 関根 千恵

ポトリ落つ音静かなり寒椿  
雑煮餅思はず喉をさする癖  
語気強く誓ふ新年衿正し  
伊勢海老や福を呼び込む髭力ひげぢから

さいたま 佐藤 克之

琴の音が響くデパート三が日  
寒林や沈む夕陽に鳥の群  
白き山遠くに浮かび冬童  
蠟梅の放つ香りや上がる声

さいたま 千坂 平通

煮凝を子らの皿へと祖母の箸  
境内の鈴の音乾く寒日和  
青白き朝の障子や子の戻る  
松明けて釣人の黙戻る沼

菅原 真理

人嫌ひすこしつのでりて漱石忌  
渋滞を告ぐるラジオや年の暮  
凧や逆さに立てる竹箒  
藁葺の屋根の小雨か冬紅葉

若狭 檜鼻ことは

正月風競ひ合ひつつ天駆ける  
お手付きも目で許しあひ歌留多取り  
昨日までの企業戦士や日向ほこ  
病みて知る心配りのとろろ汁

和歌山 嶋田 洋子

もやもやが頭の中に冬の月  
布団干す子らの帰りを待ちわびて  
リズム良く餅をつきたる爺と婆  
湧水にかすかな濁り寒の鯉

東京 畑宮 栄子

寒き夜辞典に父のくせ字メモ  
初観今年の夢を一文字に  
入魂や作務衣の書家の初観  
文字流れ絵画の如し初観

さいたま 湯浅 和

百二歳の姉の声聞く初電話  
初写真馳走を前にハイチーズ  
ゐないゐないばあに稚児の初笑  
アンコールに寡黙な指揮者初笑

さいたま 安倍 弘夫

寒雲を後にし一路南国へ  
寒風やホテルの前は東シナ海  
鯛の煮凝ゼラチンを増し上出来に  
賀状の友キリマンジャロを踏破せし

森下美智枝

裸木のブルー電飾街を染む  
風に乗る居心地よろし都鳥  
百合鷗空に五輪のインパルス  
風に乗れたをやかに飛ぶゆりかもめ

長井喜代子

和歌山 葛城千世子

実南天こぼれんばかり松と組む  
寒ぬくし百一歳で逝きし母  
神饌は尾ひれの動く寒の鯛  
違ひ箸の上手な曾孫寒の内

娘にすべてまかせ気楽や除夜の鐘  
思ひきり丈剪りつめる冬薔薇  
餅を搗く孫の雄姿や亡夫想ふ  
露の臺孫が隣に住む暮し

藤沢 小島喜代子

越谷 阿部 幸代

煮凝りに更け行く寮の厨かな  
振り向けば街を包みし寒夕焼  
寒餅が母の里より届きけり  
初御空トランプペットが高らかに

公園に子等の歓声風花す  
富士山の長き裾野や淑気満つ  
小正月笛先導の曲芸団  
心静かに墨をすりある淑気かな

さいたま 山下ユリ子

鬼石 榊原 聰子

「ホームラン打つ」と黒々お書き初め  
蠟梅の香に迎へられおくられて  
櫓より達磨のにらむどんだかな  
土砂被害まだそのままに年明くる

初日の出太平洋に光充つ

さいたま

小駒さち子

小川 藤間 友二

初富士や丸き地球の海の上  
吹初や威風堂々響かせり

忍野池雲を浮かべて富士雪解  
三景や白砂青松初景色  
枸橋の垣の真や峡の家

力満つ乗り手支へて出初式

味に満足なほ三日目のおでん鍋  
初詣微笑む巫女の少女顔

武田 重子

流行風邪戸棚の隅の常備薬  
おでん酒鬼の上司の愚痴話  
世を生きて七十余年初視

下手な字も味はひのある年賀状

三越の日の丸そよぎ年始め  
年明くや並ぶ屋台に鳥の目

木村るみ子

喧騒に香煙混じる初詣  
ペランダで令和の初日拌みけり  
通販の料理並べて三が日

初電車キャリーバックと紙袋

剪定の捗るリズム寒日和  
鈴生りのおみくじ光り寒日和

緒方みき子

大寒や大声でゆく通学路  
店先に冬の苺の香の甘し  
ふきみその一品ふえし朝の膳

冬晴やジャンゲルジムにはしやく子ら

水仙の袴整へ密に活く

岡田 宣子

寒すばる宇宙を監視する如く  
冬の鳥残る赤い実二つ三つ  
三代で目と手の勝負歌かるた

四世代の靴が揃ひて年新た  
初空や飛行機雲は西に伸ぶ

風折れの枝の再生今朝の春  
深煎りの珈琲いかが初鴉

大阪 遠藤 人美

縦書きが少し身につき初句会

都鳥お台場にをり微動せず  
都鳥芸妓とコラボ清楚なり  
夫とハグをガラスにうつり暮の夕

田中 タイ

さいたま

綿貫ひさの

三郷

沼尾 岳

鬼石

加藤ナヲ子

『俳句四季』二月号  
今月の華



【私の愛蔵品】

高校の修学旅行の際、北海道の「阿寒湖アイヌコタン」で買ったペーパーナイフ。65年間愛用している。

縁は異なもの

昭和四十七年（一九七二年）十二月某日朝、最寄り駅北浦和から神田までの通勤途上、蕨駅と西川口駅の間地点の線路際にある町工場から、純白・等身大の人形らしき物が運び出され、小型トラックに積み込まれる光景を、電車の車窓から一瞬の内に視認した。それが何であるのかその時は分からなかったが、数日後に、町工場がマネキン人形の工房であることを知り、件の物体が、工房から顧客の元へ運ばれるマネキンであったことを認識した。その日の朝は冬霞が発生して幻想的な雰囲気醸し出しており、霞の中をマネキン人形が何処へ運ばれたのだろうと、素朴な疑問を抱いていた。

それにしても、何故「目白」という土地の名前が出たのか、今でも不思議に思っている。本句が、『俳句研究』昭和四十八年三月号の雑詠投句で、憧れの三橋敏雄氏の推薦を得る結果となり、ただ一人一ページに句と俳号

マネキンを目白へ運び冬霞 山本鬼之介

（当時の俳号・飛鷺<sup>ひろし</sup>子を名告っていた）そして、選者の克明な句評が掲載され、大感激した。以下にその要点を紹介する。

（前略）句意は、そういう環境にある届け先へ、「マネキン」人形を運んでいったところ、たまたま辺りは「冬霞」の景であった。というわけだが、それを面白く思う私自身、面白さを定かに解説するのはまことに困難である。要点は、「目白」という特定の土地柄を如何に感受するにかかわろう。あるいは、土地柄について知らなくとも、この固有名詞の文字面が誘う、複合的な情趣の不思議な手がかりにできるならば、マネキン人形とその運び手を媒体にして、かかるカスミの諧謔世界を味読し、共感してもらえようかと思う。

この名文を読んで大感激し、俳句を始めて一年余の若輩が、以後半世紀近くも俳句に係わる切っ掛けとなった。たまたま視野に入った女体らしき「マネキン人形」との縁を、今もって懐かしく、また、嬉しく思っている。

## 作品評

### 山本 鬼之介

一葉の肩を揉みたし冬柳 保坂 翔太

明治二十九年十一月二十三日に亡くなった樋口一葉の忌日は、「一葉忌」として冬の季語になっている。右の作品は、井上ひさしが、昭和五十九年（一九八四年）のこまつ座（井上ひさしに関係する作品だけを上演する）旗揚げ公演のために書き下ろした戯曲『頭痛肩こり樋口一葉』が原点になっていると思われるが、ただそれだけで片付けてしまうには惜しい俳句である。胸の内に情熱を秘めた一葉に寄り添う冬柳にも、一葉と同様に熱い血が脈々と通っていると言いたいのだろうし、冬柳に作者自らを投影しているところに、新派の芝居を観ているような洒脱な雰囲気を感じる。

日脚伸び舟の影曳く佃島 野田 静香

佃島の起源は、昔々隅田川の河口に誕生した小島であり、江戸時代初期の寛永年間に、摂津国佃村の漁民を徳川家康が招き入れて出来た漁村として発展。現在の東京都中央区の南東部に位置する「佃」は、埋め立てにより北の石川島、南の

月島に接続したものである。

この街一帯には、未だに昭和の下町情緒が色濃く残っており、「天安」や「田中屋」など、江戸時代からの佃煮の老舗も健在で、観光がてらの顧客も多い。久しぶりに訪れた作者の眼に、島であった頃の汀の幻影が映し出されたのであるか。中七の言葉の斡旋が巧みであり、読者の共感を呼ぶ。

佃大橋が完成した昭和三十九年までは、対岸の明石町から佃の渡しがあり、小学生の頃、筆者が悪童たちとその渡船で日がな一日遊んでいて、船頭にこっぴどく叱られた懐かしい想い出がある。

人日や列なして観る「ミイラ展」 正木 萬蝶

世界的に有名な絵画や工芸品そして仏像など、東京では上野の森を中心に年間を通して展覧会が多く、多くの観客が列を為す。この句のミイラ展もその一つで、興味旺盛の人々が、朝から列を作っている。墳墓の奥深く眠っていた古代の人にとっては、まことに迷惑なことである。「人日」という季語が一興を添えている。

出囃子の音 一月の六区街 河野はるみ

浅草六区街にある寄席から流れてくる出囃子の音で、落語通であれば、どの噺家が高座に上がったかが分かるのだろう。新型コロナウイルス感染症問題で客足が激減している浅草であ

るが、通常であれば、正月からの人出は一月を通じて好調の筈である。上五から中七にかけての句またがりのリズムが小気味良く、はるみワールドに引き込まれてしまった。

目が覚めて夢の彼方へ宝船 日高 徹

元日の夜、七福神を乗せた宝船の絵を枕の下に敷いて寝ると、幸運な初夢を見ることが出来るというこの習慣は、室町時代に始まって江戸時代に急速に普及したと聞いたが、今では、この習わしも遠いものになった気がする。

さて、この句よく読んでみると、季語である「宝船」に加えて、「初夢」も巧みに季語を外して介在させていることが分かる。初夢の中で胸を膨らませた幸福感も、覚めた後には跡形も無く消え去っていたという寂寥感が、新年俳句の領域を超えた深みのある俳句に仕立てている。

寒紅や鏡の中に違ふ顔 越田 栄子

季語の「寒紅」は、現代では寒中に用いる口紅と解してよいとされているが、本来は日本古来の紅即ち紅花の色素を分離して作られる希少価値の高い艶紅（本紅）の意であり、寒中に作られる紅は特に色鮮やかで美しいとされてきた。今でも昔と同様に貝殻や陶製の容器に入ったいわゆる京紅と称される紅が販売されており、役者や舞妓・芸妓などの特別な職業の人だけでなく、一般女性も用いているようだ。

鏡台に向かって貝殻の紅を薬指に取り、ゆっくりと唇に差す。古の女人と化した自分を発見。紅差指が息づいている。

読初は書棚の中の風雲児 近藤 徹平

「風雲児」を文字通り解釈すれば、「好機に乗じて世に頭角を表した人」であり、豊臣秀吉や田中角栄など数人の人物像が浮かんでくる。おそらく作者の書齋の書棚の中に、作者が憧れを抱いた風雲児の伝記本が数冊所蔵されているのであろう。それらの風雲児が揃って飛び出してきそうだと。

二枚刃の剃刀の傷鏡餅 青木 鶴城

電気シェーバーは無論のこと、手動の安全剃刀も三枚刃や四枚刃になった今、二枚刃にはやや時代遅れの感がある。そういう筆者も依然として二枚刃の剃刀を使っているのだが。慌てていてうっかり顔を傷つけてしまった。じんわりと血が滲んでくる頬をティッシュで押さえて血の止まるのを待つ。出かける際に玄関の姿見を見て、傷の具合を確かめる。その側には、艶やかな肌の鏡餅が、その男を揶揄するように鎮座している。

臘梅の気付かれぬやう気付くやう 渋谷きいち

臘梅のやわらかく気品のある香りは、冬に咲く花の中でも独特の存在感がある。沈丁花や木犀などの強い香りの花と違



つて、離れた処から人を引き付けるのではなく、少し通り過ぎてからその香りに気付くような花ではなからうか。まさに本句が示す通りの花であることを実感した。

冬の霧口のほぐれぬバスガイド 曲淵 徹雄

冬霧の印象を一言で表すと、夏や秋の霧とは違う陰鬱さを内蔵しているということか。バスガイドの口が円滑でないのが折からの霧で窓外の見通しが利かず案内に支障を来しているという物理的なものなのか、或いは、個人的な理由で滑舌が悪くなっているのかとも取れるが、あまり深くは考えず、霧によって何時もの調子が出ないというのが妥当であろう。作者の実体験によるものかと思うが、折角の楽しいバス旅行に水を差された感じである。

空を切る手先鮮やか初かるた 大塚 茂子

競技歌留多のような超ベテランによる会ではないが、正月にその道の同好者が集う活気あふれる歌留多会なのであろう。人差指から小指までの四指をぴたりと揃え、一瞬の内に札を取る払い手（撥ね手）が決まった時の手先の動きを表現した臨場感あふれる俳句である。

底冷や鞆に捜す家の鍵 染谷 正信

財布やスイカカードなどと同様に、自宅の鍵は大変大事な

物で、ポケットに入れていて落とすこともあり、特に外で酒を飲む時には、鞆の奥に仕舞い込んだりすることがある。夜遅く帰宅して鍵を開けようとポケットに手を入れたが鍵が無い。もしかして何処かで落としたかと慌てたが、鞆に仕舞ったことを思い出してごそごそ捜している。その内に隣家の猛犬に怪しまれ吠え立てられてしまった。筆者も経験者である。

御仏の口に引きたや寒紅を 神田 治江

仏像に性の区別はあるのか。素朴な疑問であるが、物の本によれば、如来と菩薩は性を超えた存在で、男性でも女性でもないとのことで、観世音菩薩も然りである。とは言え、仏像に接していると、いかにも女性のように思える仏様や、女形にしたいような仏様もおられるので、作者の気持がよく分かる。しかし、実行してしまうと、器物損壊罪に問われるので要注意。

婿殿の切りし伸し餅初明り 宮崎チアキ

今のように個包装した切餅が販売されてなかった時代に、筆者も年末に伸し餅を切ったものだ。なかなか均一の大きさにならず、妻や子に笑われた。この句の切り手は婿殿であるが、婿殿と言えば、時代劇テレビドラマ「必殺仕事人」で、藤田まことが熱演した中村主水をいびる姑役の名脇役女優・



菅井さんの『婿殿』の台詞が今でも耳にこびりついている。

豪快に伯方塩撒く初相撲 原田 秀子

令和二年の大相撲初場所千秋楽を観戦する機会を得て大満足した。滅多に見られない変化に富んだ内容の濃い場所であり、観客は勿論のこと、力士の面々も優勝者や楽日までの候補者を軸に大いに興奮したことであろう。轟音を上げて落下する滝のように、巨大な手に山盛りにした塩を豪快に撒く力士も居て、高級な伯方塩が一体どのくらい使われたのだろうか、要らぬ心配をしたくもなるのだろう。

着ることの無きや春着を吊し見る 飛永 鼓

平面的に掲句を読むと理解しにくいのが、「山内かぶら」の耕作や出荷、そして、それにまつわる多方面への出張など、作者の多忙な日常を聞くにつけ、この内容が分かった気がした。

地震の跡のこる原野の若菜摘む 加藤でん治

ここ数年に亘って地震や台風による自然災害が多く、全国各地に被害の跡が残っている。自然の力は偉大で、そのような災害の跡地にも季節の訪れを告げる若菜が芽生え、すくすく成長してゆく。摘む人にとってのひと時の歓びである。

日脚伸び少しスリムに影法師 新 暦文

年の瀬を迎え冬至を過ぎると、日を追う毎に微妙に日が延びる実感があり、大寒を過ぎる頃には、夕方の挨拶にも具体的に表現される。日没前の夕陽を受けて長く伸びた自分の影を振り返り、他人の影のように思えたのだろうか。近づく春を迎える歓びがこの一句にこめられているように思う。

学童の一列歩行冬田道 山崎 郁子

暖冬のせいかな年末年始に降雪が無かったと聞いた若狭の地。疎開していた昔に筆者も学んだ三田の小学校に登校する児童であろう。往時は積雪も多く、雪を踏む大人の後について通学したものだ。雪は無いものの、吹きさらしの冬田道を黙々と歩く学童の姿に自分を投影し、感銘深く鑑賞した。

パン屑へ藪抜けてくる寒雀 山岸 弘子

遠くからでも餌の在り処を察知してやってくる雀の本能に驚いてしまう。「藪抜けてくる」がこの句の要である。

信楽の狸と遊ぶ落葉かな 水野 興二

菅笠を被り一升徳利を提げた愛嬌あふれる信楽焼の狸との遊び仲間に落葉を当てたことで、句に深みが生まれた。

# 水琴窟

(水明集二月号鑑賞)

池田 雅夫

スモックの釦ちぐはぐ今朝の冬

細井 良子

「スモック」は手芸の技法の一つで、細かくたたんだひだを寄せてかんだもので、ゆったりとした仕事着に用いられる。簡単に着られるスモックの釦さえ、ちぐはぐにかけてしまふほど寒さが身にこたえている。立冬を肌で感じている。

ねんりんピックの衣装華やく小六月

葛城千世子

今回の「ねんりんピック」は和歌山県で開催された。有田川町では「あふれる情熱 はじける笑顔」をテーマに俳句交流大会が盛大に行なわれた。その祭典ではさまざまな趣向が催される。和歌山の気候風土と「小六月」の季語がなじむ。

百段を埋めつくしたる散り紅葉

鈴木 和子

百段の石段で思い浮かぶのが、東京・愛宕神社の石段。実際には八十六段であるという。その昔、曲垣平九郎が馬で駆け上った話は有名。しかし、石段を埋め尽すほどの紅葉の樹木は見当らない。京都など、別なところかも知れない。

車窓より見る黄落の早回し

杉浦 理恵

黄落の代表的な銀杏落葉。神宮外苑絵画館前の銀杏並木を思い浮かべる。銀杏に限らず、ポプラ並木や欒並木などが各地に存在する。車窓からの風景は動きが早く、まるで「早回し」のように思えたのだ。的確な表現に共感する。

古民家の籠の欄間や隙間風

千坂 平通

和風建築の天井と鴨居、長押との間にさまざまな趣向をこらした透かし彫の欄間がはめ込まれていた。透かし彫であるため光や風がすり抜けてくる。籠の欄間を設える家は大変、由緒ある家にちがいない。「隙間風」を取り合せと解釈した。

万感の笑顔の即位秋日和

岡本 祥子

十一月十四、十五日、令和天皇の大嘗祭が行なわれた。新天皇の温和な笑顔は平民にはかり知れない安堵感を授けている。天皇としての重責は想像もつかないが、それを包み込んだ笑顔である。雨の後の晴天は正に「秋日和」であった。

絵画館銀杏黄葉も作品なり

外村 紀子

明治神宮外苑の絵画館前の銀杏並木は有名である。その黄葉は華々しく、それだけで絵画館の画に匹敵すると詠んだ発想を称える。「銀杏黄葉の大展示」としてもよいのでは。

張り替へし障子に猫の爪の跡 湯浅 和

冬の用意の一つとして、新しい障子に貼り替える。もちろん正月の準備のためでもある。破れた障子の穴を猫は出入りしていたのだらう。貼り替えられた障子にも猫は無頓着に爪をたててしまったのだ。叱ることもできず容認するしかない。

上州の山を動かしからつ風 加藤ナヲ子

「上州のからつ風」と謳われるほど有名である。武田信玄は「動かざること山の如し」と詠んだが、上州のからつ風は山をも動かすというのだ。きっぱりと詠み切ったところにこの句の本質がある。三山が離ればなれなのはそのせいか。

武家屋敷石路の花咲く津和野かな 小駒さち子

山口県津和野は亀井氏の城下町で、小京都とも言われている。幕末の長州を思い浮かべる。その名残りの武家屋敷に石路の花が咲いている。「石路の花武家屋敷なる津和野かな」と語順を変えるなど、推敲することも楽しみの一つである。

鋤焼の講釈長き父の声 板子由美子

世に言う「鍋奉行」の父なのかも知れない。たしかに美味しく作るであろうが、食べ始めるまでの長い蘊蓄に閉口している。「講釈を長長と父」として、父を強調したい。

ゆかりの地薄日に白き冬桜 木村るみ子

「ゆかりの地」は冬桜の鬼石町であらう。だとすると、そのゆかりの人は長谷川零余子ということになる。上五に「ゆかりの地」を据えたことに感心した。また、「薄日に白き冬桜」と特徴をしつかり捉えている。桜山の光景が見える。

団欒に狐の影絵白障子 鈴木 藻好

家庭の遊びとして、影絵は馴染みが深い。手でつくる犬、狐など簡単に親しみやすい。貼り替えて新しくなった障子の明るさが一層、影絵をひきたて、正にだんらんであった。子供たちの笑い声が聞こえてきそうだ。なつかしいなあ。

大谷川神橋の奥濃紅葉 沼尾 岳

日光・大谷川に架かる朱い「神橋」は有名で、観光の名所の一つである。世界遺産の日光に含まれている。その神橋の「朱」に負けず劣らず濃紅葉が一景をなしているというのだ。中七を「神橋奥の」とすればスムーズに読むことができる。

師を慕ひ桃李成蹊初句会 藤間 友二

「桃李成蹊（とうりせいけい）」は、徳のある人はだまっていなくても、人が従って集まってくるので自然に道ができるという意味である。初句会にふさわしい祝いの句と言える。

鼓

笛

集

山中順子選



有るがま・まに己を生きて雪柳  
春の雨あの日ま・まに郷の駅  
宇宙まで流れのままに磯巾着

青木 鶴城

羽音立て霏より出づる鴨の陣  
空を割る飛行機雲を冬茜  
残る雪掬へば覗く若芽かな

春の宵婆は地藏と駆け落ちす  
春一番空へ義足の大ジャンプ  
来世また夢の続きを涅槃西風

松島 寛久

頭から目刺頬張る若き嫁  
大棧橋のテープ弧を描き春浅し  
一羽翔ち続いて三羽ゆりかもめ

森 和子

小春日の羽二重餅と女学生  
おでん鍋の箸を滑りぬ大玉子  
信濃路の牧水歌碑の風花す

保坂 翔太

武蔵野にちらとスパイス風花す  
下萌や土手の匂ひの解れ初む  
公園の裸像のくすみ春寒し

曲淵 徹雄

夫婦喧嘩のうさ晴らしたる鬼やらひ  
鬼やらひ海馬に去年の豆ひとつ  
春雪にぼんやり化粧ふ竜安寺

正木 萬蝶

砂漠行くラクダの列の陽炎へり  
慢心を母に叱られ春の雷  
鈴の音や廃車の下に猫の恋

新 曆文

白妙の連山染めて寒茜

肩衣の力士さやかに節分会

春寒し空に大きな傷ガーゼ

下萌えに嘶ゆ身重の牝馬かな

下萌ゆる生きとし生けるもの笑顔

姉の葬日取まだしの余寒かな

春浅きベルシヤガラスの透けし瓶

草萌の回廊あたり薬師跡

雛頭おすべらかしの手際良さ

常しへの平穩願ひ黄水仙

菜園の虫喰ひの葉よ春立てり

春節や一本立ちのフラミンゴ

初場所や身を乗り出して大一番

春の土の抜きたて野菜無人店

登り来て疲れ吹きとぶ蠟梅林

行く雁の列の乱れも雲に溶け

川の辺の裸木揺らす余寒かな

山なみの空深くして春の星

横山 君夫

安倍 弘夫

諏訪サヨ子

宮崎チアキ

森下美智枝

秋本力ズ子

横なぐり雪は飛礫を打つやうに

凍ゆるみ踏む畑土の日々新た

作り慣れいつしか十八番のつべ汁

肌隠す札拜堂の余寒かな

廃屋に住みつく猫や春埃

牧羊の群はるかなり春の雲

山口 韶子

田中 泰子

鼓笛集巻頭（三月号）

私の好きな一句（自句自解）

橋本 京子

玉砂利に軽トラ止めて年用意

十二月中旬表参道を歩きランチをしようと女四人が原宿に集合した時の事、信仰心のない私ですが記念にと御朱印を頂き初めたのです。原宿とくれば明治神宮と思ひ集合前に頂いて来ようと砂利道を急ぎました。鳶職の人達が大勢新年の用意に働いているのに出会い見たままの句です。

## 鼓笛集作品評

山中 順子

有るがま・まに己を生きて雪柳  
春の雨あの日のま・まに郷の駅  
宇宙まで流れのま・まに磯巾着

青木 鶴城

ままの連作、一見何も考えない強いて言えば倦怠感の句のように見られるが、よく読むと充分に計算された三句に仕上がっている。それは季語がその音調を整えているからです。

儘、任、随、物事のなりゆきに随うさまとあるが、こんな人生を送ることが出来たら幸かなと思う。いろいろな事に挑戦する作者の感性に呼び止めて見たくなる。

春の宵婆は地藏と駆け落ちす

松島 寛久

何とも不思議な句である。石の地藏さんはどうやって走ることが出来るのか。それも婆とである。若狭のあの谷の神秘をフィクションしてくれる。春の宵の出来ごと。

# 急告！

## 全国大会

### 延期のお知らせ

水明全国大会は新型コロナウイルス感染症の蔓延により十一月（予定）に延期する事になりました。詳細は追ってお知らせ致します。

主宰 山本鬼之介

# 俳誌望見

梅澤 佐江

『蘭』 令和二年一月号 通巻五七八号

主宰 高崎公久 発行所 福島県いわき市

昭和四六年一二月、野澤節子が横浜で創刊。師系大野林火「自然と呼応する生命の声と心の在り様を一句に凝縮」を理念とする。(月刊)

主宰句「富士」一五句より

東京渋滞澄む冬天は富士日和

湖五枚従へ富士は冴ゆるなり

立冬の月に弧を張る芙蓉峰

冠雪の富士ほんたうの姿である

雪を被し富士の真顔ぞ恐ろしき

一句目、渋滞の都心を抜けると雲一つ無い冬晴れの空に冠雪の美しい富士が泰然と構えていた。二句目、湖五枚従へ)の措辞に富士の凜とした佇まいが見えてくる。三句目、(芙蓉峰)の座五が富士の唯一無二の風雅を称えている。四句目、やはり冠雪の富士こそが秀麗なのである。五句目、冬の富士は美しさとは裏腹に、挑むものには容赦なく命を呑み込む怖さも合わせ持つのである。全編を通して正に富士への畏敬に

溢れている。

白寶集 一九名 各六句より 三名を一句ずつ紹介

出水退きローマへ続く道が現る 清水 仙里

露草の露さらひゆく日射しかな 高橋美登里

おしはかる樹齡静かや七五三 中田 照美

青風集 五八名 各五句より 三名を一句ずつ紹介

秋彼岸ベターハーフの我残し 芥川 卓

冷まじや時計無情のICU 中山 雅弘

コスモスや噂話にゆれてをり 山川小夜子

蘭作品 四八名 各五句より 三名を一句ずつ紹介

名画座に好みの役者いわし雲 清水千賀子

靖国の拝殿に満つ秋気かな 蛭田 恭子

熟れ柿の落ちてその体なくしけり 永沼 育子

森羅万象との関わりの中で紛れもなく自身がそこに存在しており、喜怒哀楽を余情を持って感性豊かに詠まれている。令和二年度蘭賞・鳳蝶賞の受賞者及び作品発表の皆様方の力作を読ませて頂き、研鑽を重ねられた姿勢に触発された。更に、俳句月評(Ⅱ)『角谷昌子著「俳句の水脈を求めて」平成に逝った俳人たち』を読む』は、一二人の先達俳人の方々の逸話に同時代を生きて句座にまみえたかっと思いつつ、改めて大変興味深く拝読させて頂いた。

## 句集喝采

近藤 徹平

### ◆伊藤政美「青時雨」

菜の花会

著者略歴 昭和十五年三重県四日市市生。昭和三十八年山口いさを主宰「菜の花」創刊に参画。編集長、同人会長、副主宰を経て、平成十五年より主宰。句集『二十代』『天の森』『天網』『二十代抄』『天音』『父の木』『四郷村抄』。三重県文化功労章、四日市文化功労者表彰。現在、現代俳句協会副会長、その他。

著者所屬の「菜の花」は、異例だが社内俳句クラブから著者達の活躍で今日へ発展してきた結社であり、おそらくは既成結社にない自由清新な気風の中で育まれてきたと拝察する。半島は父の腕や夏来る

さつきまで亡き人とをり青時雨

流星や母に選ばれ生まれたる

一句は著者の地元四日市市のある紀伊半島で活躍した父君を尊敬する句意。二句は「あとがき」によれば句会発足以来指導された先代主宰へ捧げた追悼記「いさを先生は雨男」に因む句で、句集の表題とした。三句は母堂を限りなく感謝する句意。

春星飛ぶ我が一生も誤差のうち

花野とは棺の中で見る景色

生き方で決まる死に方蟬の殻

「あとがき」では無意識に生死に関わる句が多くなった由。一句は地元の公害発生当時の試行錯誤を顧みた心境か。二句は終活期の筆者も全く同感。三句は顧みて我が人生に悔いなし。

### ◆守屋明俊「象潟食堂」

角川書店

著者略歴 昭和二十五年信州伊奈高遠生、浅草に育つ。昭和六十一年「未來図」入会、鍵和田柚子に師事。平成三年未來図新人賞。平成十一年未來図編集長。平成十四年未來図賞受賞。句集『西日家族』『蓬生』『日暮れ鳥』『自選守屋明俊句集』。未來図編集顧問、俳人協会評議員、日本文芸家協会会員。

象潟や蕎麦にたつぷり菊の花

たましひを鎮め得ずして蟬時雨

汚泥田に案山子は立たず雀来ず

職務や私事の旅先で多くの句を残している。一句は句集の標題とした句。象潟は芭蕉が『奥の細道』に二句残した景勝の地だが、著者はあとがきに「駅前象潟食堂が在り、老夫婦が飄々と睦まじく切り盛りしていた」と記している。二句は沖繩再訪時の鎮魂句。三句は令室の故郷の水害発生後に訪問した際の句。

勤め上げてこれからの翁草

未來図は波打ちぎはの如く春

香水一変自由が丘で乙女乗り

虫干の地球へ帰る宇宙船

著者は「あとがき」で、良き指導者に巡り合えて一つの狭い世界に閉じ籠ることなく、自分しか詠めない世界を見付けようと努めてきた由。一句は定年退職直後の句。二句は句会三十周年記念。三句、四句も心の赴くままに詠んでいることは明らか。



『現代俳句』 12月号

結社の若手(7)

「水明」の若手

（もう一度新人、もう一度青春）

網野 月を

「水明」の若手は、新人ということですが、新規入会者のほとんどは六十代を中心としていて、五十代以上の方々です。順次会員の若返りをしています。会の運営の担い手の若返りは十才前後平均年齢を下げるのが通常です。

「水明」では、地域の文化活動にタイアップして、初心者講座となる「初めての俳句教室」を五、六年前から毎年開催しています。二十名を超える応募者があり、二日間の教室はほぼ満員です。俳句の概要、「俳句とは何か」「俳句で何が出るのか」「俳句の表現する世界」から始められ「五七五の定型リズム」「季語の世界」などを講義形式で授業して、実作に移ります。二日目は隣接の公園で吟行会を催します。投句を添削したり、合評会をしたりして俳句ならではの楽しい時間を過ごして貰っています。

文字通り初心者ですが、還暦後の新人ということですが。そうした方々に俳句を通じて「もう一度の青春」を味わっていただければと考えています。

もちろん、「水明」会員からの勧誘や個人的に俳句に興味を持たれて「水明」の門をたく新人会員もいらつしやいます。次の揚げる十一名はここ数年の間に「水明」に入会し、且つ現代俳句協会にも入会した方々です。

渋谷さいちさんはハンサムな風貌に似て句柄も丹精です。それでいてリアリテイのある景を創り出しています。

表札に残る父の名夏の暮

さいち

コンビニの袋と遊ぶ秋の風

陽の落ちて影絵となりぬ芒原

新曆文さんは定型のリズム感を大切に作句されます。用言を多用しない分、句は落ち着いた雰囲気を持っています。

野分あとやけに煌めく星のかず

曆文

星月夜貧しき国の頭上にも

リハビリの狭き歩幅に秋の風

青木鶴城さんは入会後僅か二年で、今年度の結社誌新人賞（新珠賞）を受賞しました。

秋しぐれ頭にかざす手の広さ

鶴城

始まりは「とりあえず」と言ふビールかな

急登の霧と鎖と力瘤

保坂翔太さんも新人賞受賞作家です。句意の飛躍が大きな

句柄です。ファンタスティックな感覚も併存しています。

一匹の蚊を討ち果たす丑の刻  
翔太

聞香に少女の居りぬ夜の秋

絵本読む母もまどろむ合歡の花

日高徹さんは句材が多岐にわたります。一見空間的に広がりを見せていますが、時間的感覚も拡散、収斂します。

カルダゴの海の青さよ花栢榴  
徹

秋晴れのセクターポール日章旗

「外郎売」の口上長し秋まひる

杉浦理恵さんの言語世界は特異です。既成の型に嵌まらないで大きな把握をします。

芋虫の思案しどころ枝分れ  
理恵

なべ振りてほのほ蕃椒宙に舞ふ

大西日金色に酔ふクリムト展

越田栄子さんは俳句誌を作り出している感があります。無尽蔵な想像世界を持っているからでしょう。

秋の風牛の睫毛が反りかえる  
栄子

禅寺の磴に色添へこぼれ萩

ふくふくの赤子を抱く良夜かな

神田治江さんは発想の豊かさが目立ちます。その発想を句としてまとめ上げるオリジナリティも持ち合わせています。

翳雲農婦の髪に白まじる  
治江

向日葵の芯の強さやたしかなり

木の実落つ疎林に一つ音たてぬ

橋本京子さんは景を的確に捉える揺るぎない視線が持ち味です。身近な材料でも概念的な内容も句にしています。

蛸やラジオ体操身ならず  
京子

ハミングの音の外れや秋高し

柿照るや人影動く轆轤小屋

梅澤輝翠さんは俳句で表現したい独自の世界観を持っています。その分美意識に冴えが生じます。

唐辛子地蔵のべべと競ふ赤  
輝翠

敬老日漁師の背広座りをる

曲り角仄かに灯す秋の家

近藤徹平さんは鋭敏な言語感覚をお持ちです。言葉の組合せ方が特徴で、組合せ方法は堅固なことも共鳴し合っていることも、捻れていることもあります。

海霧深し生まれ故郷は今他国  
徹平

秋灯下キープボトルの千社札

飛行機雲へ蝗の跳ねる千枚田

いまの「水明」は新人同士が自己表現を受け容れてくれる仲間と出会う場になっています。思いを分かち合う句友との時間を大切にしたいと思います。



狭けれど行儀良き部屋水仙花  
雪吊に加賀宰相の心ばせ

喜久  
昇

冬海金の水脈ひく入日かな

徹雄

立春や富士押し上ぐる大裾野

祥絵

鬼やらひ海馬に去年の豆ひとつ

萬蝶

豆好きの節分歳の数忘れ

理恵

島点灯手繰り寄せたし冬の海

由美

袋小路の闇に一擲鬼の豆

大場順子

日一日待つこと楽し牡丹の芽

清

節分や見え隠れする為人

康世

福は内米寿の豆の福の数

喜久

豆撒や若園長の嵌まり役

雅夫

テノールで粹に豆撒く優男

岡野順子

### 第四例会 (浦和)

石井

喜恵報  
延昭

金縷梅咲く三年ぶりの嫁御寮

マスミ

薄氷に風の遊あそびか幾何模様

光弥

薄氷やちちは遠くとほくなり

昇

まんさくが捲る山辺の花暦

寛治

薄氷に遊魚の匂ひ残りけり

曆文

まんさくや拗ねて振れて次男坊

延昭

来たる世を透かして見たし薄氷

喜恵

喜久

昇

徹雄

祥絵

萬蝶

理恵

由美

大場順子

清

康世

喜久

雅夫

岡野順子

### 第五例会 (浦和)

梅澤 佐江報  
河野はるみ

鮫小紋縫うて感謝の針供養

水尾

わが里は山尽くる村春時雨

萬二郎

横丁を傘かしげして春時雨

はるみ

クッキー缶が母の針箱針供養

理恵

小町糸とほしたままの針供養

佐江

待ち合はす春の時雨の二月堂

江

簾を風そよぐやに春時雨

〃

針塚に塩も納めて針供養

〃

鯨尺考の筆跡針供養

萬二郎

以上特選

翔太

光子

修

順子

玲子

でん治

延昭

恵子

寛治

昇

喜恵

おさらひの歌舞練場や春しぐれ

美佐尾

火伏せ札幌の点りて春時雨

義子

江戸しぐさ学ぶ社に針供養

はるみ

針供養子らの名札を付けし針

理恵

納め針ひとかたまりに光りあふ

佐江

### 関西例会 (大阪)

森本 早苗報

猫の恋知らぬ生涯ライとルナ

早苗

抽斗に聖書一冊猫の恋

玲子

黄砂季やコロナウイルス回れ右

千津子

猫の恋ままにならざる猫ハウス

礼子

開分かつ三毛のまなこの爛爛と

敦子

わが声に恍惚として猫交る

ゆら女

シラノと猫どこか似てゐる恋をかし

洋子

梅は散り煙草の煙すれ違ふ

智恵子

春の猫四五匹はゐて庵主留守

和子

猫の恋寝不足の吾も嗶れ声

道子

新築のつづく奥より孕み猫

千枝子

猫の恋愛の讃歌で呼びよせる

さわゑ

### 婦人句会 (浦和)

西山貴美子報

春の霜残る一畝犬が嗅ぐ

さく子

身の上を語り出したる春シヨール

〃

飛び梅や義太夫節の語り分け

ひさの

梅はつはつ語尾の短かき鳥言葉

貴美子

今昔を語り海見る実朝忌

以上特選

春の霜庭の小さき野菜畑

さく子

庭師来て春のうす霜置いていく

順子

寒明けや語りたきこと零れ出づ

愛子

祖父の忌や墓石に薄き春の霜

由紀子

産土の風うすうすと春の霜

ひさの

### 若松句会（京橋）

菊池ひろこ  
石田 慶子 報

春雪や夜半に解けゆくわだかまり

萬蝶

ちぐはぐな別れ春雪降りやまず

千春

春の雪失くしたはずの宝くじ

月を

淡雪をうつすら乗せて三輪車

慶子

小社に落ちては消ゆる春の雪

はるみ

灰色に舞ふ片恋の春の雪

ひろこ

春雪の宙も未来も無音なり

以上特選

外周窓にひとひら春の雪

知子

初大師いつものやうに酒饅頭

慶子

春雪やか細き仮名が宙を舞ふ

俊晴

春の雪積もるか今宵濁り酒

儀勝

をさな兒の円きほつべや春の雪

はるみ

春雪に黒髪香る乙女かな

佐江

雛菊を想ひて傘を春の雪

月を

牡丹雪お礼参りの鈴の鳴り

鶴城

撮り鉄は春雪越しの汽車待ちぬ

理恵

眉のうすきは情のうすきよ春の雪

萬蝶

爪革の緋色に溶けし春の雪

千春

ノックせし書斎は無人春の雪

ひろこ

## 全国大会の投句について

全国大会の投句は五月九日締切

です。お急ぎ下さい。

詠込み「遊」は、本誌六十五頁

を参考にして、春の季語でお詠み

下さい。

最近水明に入会された方も遠慮

せずご参加下さい。

尚、投句は巻末の投句用紙（コ

ピーも可）でお願いします。

山本 鬼之介

## 水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)

時間：午後1時から午後5時

(火・木・土・日・祭日は休み)

(上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内をお願いします。)



新樹の会 (浦和)

露味膾や伝統を継ぐ越後獅子  
気がつけば転居仕度に草青む  
鶯やもう一声を忍び待つ  
下萌や絵の具とく水又さして  
露味膾やかすかに残る浅緑  
露味膾を供へて母に味を問ふ  
豊なはる越の山山春早し  
猫車押せば下萌顔出して  
下萌や社にぼつんと忠魂碑  
水明大阪俳句会 (守口)

去るといふ二月に旗日ひとつ増え  
野地蔵の面輪百態芽吹き初む  
肉地のスタンプ列なる雪明り  
晴着でも細腕振り上げ「鬼は外」  
声色は桃色バレンタインの日  
日影さす障子一枚冴返る  
福の豆撒きて拾ふも吾れひとり  
珊瑚の会 (浦和)  
雨水かな灰で磨きし銀食器  
雨匂ふゆつくりほどく山椒の芽  
遡る小さき魚影や今日雨水  
無音より深き静寂今日雨水

鶴城 清吉 平通 京子 韶子 紅花 幾子 洋子 ヒサ子 智恵子 卓也 人美 和子 敦子 かつ子 喜恵 マスミ 水尾

雨水かな膨らみ増せり瓢塚  
山椒の芽庭にごろんと鬼瓦  
山椒の芽ポツンと赤し棘のあと  
指先でそつと触れをり山椒の芽  
雨上り山椒の芽のふつくりと  
煮魚の上にはラリと山椒の芽  
明るきを選びて摘みぬ芽山椒  
山椒の芽叩いて飾る玉子焼  
芙蓉句会 (浦和)  
春來たるデイサーピスの契約書  
立春や無事安産の知らせ来る  
友來たり梅一枝を携へて  
早春の乾ぶ空舞ふ鶯一つ  
春よ來い母が遊びに來てくれる

りそな俳句会 (浦和)  
早春のいよいよよよと開く空  
鶯餅大書滴る手漉き和紙  
早春の芝生に騒ぐ豆画伯  
縁側にうぐひす餅と老人と  
早春を突き刺すやうにジャンボ降る  
早春の淡空眠気つれてくる  
早春の連の浜海人守る  
新調の厚底シューズ春早し  
春ささず和菓子棚の色溢る

昇 恵子 光子 史代 和子 広子 和葉 節代 正子 道子 税子 美子 仁子 雅夫 寛治 曆文 久美子 建治郎 克之 萬二郎 徹 マスミ

花衣の会 (浦和)  
猫柳触るこの径尼寺へ  
春時雨大川端は墨流し  
川端や健気に伸びて猫やなぎ  
夕暮に光残して猫柳  
猫柳朝の雨粒撥ね返す  
桜林句会 (大宮)  
きりぎしの浦風なぶる水仙花  
半世紀深紅の薔薇やシャルル・マルラン  
余寒なほ青い夜空の底深し  
絶筆の城主の筆の余寒かな  
かわせみ句会 (浦和)  
扁爪の先にきらりと如月來  
ゆるやかにまはる水車や露の臺  
如月の夕富士を見るシルエット  
如月や漬物桶に手をちぢめ  
卓袱台に母の煮しめた露の臺  
露の臺衣に透けるうす緑  
露の臺淡き緑の色覗く  
如月といへば西行山家集  
水切りの小穴に少し露の臺  
盆栽の新芽が伸びる小宇宙  
ほろ苦き母の一言露の臺

敏子 智子 順枝 良枝 信子 保子 友子 治郎 紀功 育子 光一 知子 美佐尾 一恵 光子 章嘉 京子 みち 峯雄 治 嘉



たかなな俳句会 (川口)

飛鳥山裏階段にある余寒

鈴木和子

川なりに曲がる小径や下萌ゆる

義子

青空に衿立ててゆく余寒かな

妃実子

博多港暮れゆく波の余寒かな

真知子

枝先の蕾の数や残る寒

鶴城

足裏にも大地の鼓動下萌ゆる

水尾

下萌や我に囁く応援歌

静香

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

魚河岸の糶の符丁よ息白し

延昭

駆け抜けるピンクのシューズ息白し

俊晴

恋猫の地図なき路を走りけり

美枝子

土の香をほのと立たせて耕せり

俱子

麦を踏む決めねばならぬ子の進路

正信

春の雲テケテケとベンチャーズ  
屈まりて漁る艶本春浅し

淑子  
昇

芽吹句会 (浦和)

薄氷に映る金盃歪みををり

富子

猫柳活けて水辺の風を呼ぶ

玲子

薄氷へ紙飛行機の傾斜角

ひろこ

薄氷や朝陽を背負ひ登校児

千重子

衿元の触れむばかりに猫柳  
猫柳何やら父の気配して

チアキ  
徹

野ばらの会 (浦和)

無造作に臘梅一枝大徳利

秀子

蝨梅も乗せてシルバーカーの母

夏江

春立つや水面に陽の香ちりばめて

治江

立春の柱時計にリズムあり

栄子

立春の朝に鳥来る二羽三羽

茂子

立春の舟屋より船出漁す

和子

おさがりの自転車気負立つ立春

みき子

けやきの会 (東京)

立春や富士押し上ぐる大裾野

祥絵

犬一匹通らぬ朝の寒戻り

由美

父の忌の一献一花春立つ日

康世

大宮読売俳句教室 (大宮)

楸邸の瞑想の土手草萌ゆる

サヨ子

船の波寄する川岸草萌ゆる

紀子

春寒し溝に散り敷く紅き花

徹雄

土手青み座せば青春笈せり

翔太

朝練の走る一団土手青む

君夫

春寒く光り散りばむ四度の滝

卓郎

土手青む單車七半疾走す

寛治

跨線橋渡る間の春寒し

典子

草萌ゆる上野の森の子規球場

利子

料峭や色なき畑の裏通り

弘夫

春寒や手術の無事を祈る廊

治子

草萌ゆる地下足袋で踏む暖みち

正信

春寒や陸奥の山々凭れ合ふ

順子

きざきサークル (浦和)

治子

土の声風の声聞き寒明くる

かつ子

寒明や肩の力を抜き生く

俱子

寒明の水路に鯉の口数多

啓子

ひとひらのグラスに透ける冬重

和枝

散髪を一日延ばし寒明くる

喜代子

制服を脱ぎて希望の寒明ける

和子

足音のひびく街角寒の明け

千種

冬重女ふたりを屈ませて

和子

花ごよみ句会 (浦和)

春の雪夫高々と子を抱きぬ

和子

恋の時過ぎて静かに昼寝猫

君子

なりふりも美食もなかり恋の猫

ユリ子

あゆみの会 (浦和)

中天に月鮮やかや牙返る

朋和

自販機にことりと硬貨牙返る

山遊

牙返る大権どんと天をさす

圭子

塗替へし稲荷の鳥居牙返る

重子

目標の成果は努力受験生

藻好

地下道に革靴の音牙返る

好子



櫻 蔭 句 会 (浦和)

地中の眠り掘り起こされて春の土  
足跡に杖のあと添ふ春の土  
春の土蹴つて球児はボール追ふ  
水音と光引き込む春の土  
踏みしめた足裏くすぐる春の土  
鋤き込みし春の土の春命の香  
陽光を鋤き込み匂ふ春の土  
命てふ喜び溢れ春の土  
水切りの石のきららや猫柳

鶴川山百合句会 (鶴川)

想ふ事少なくなりて老の春  
おしまひのあいさつ多し年賀状  
ルージュ恋ひ町に出て来し雪女郎  
車内では白い耳栓雪女郎  
この骨の鋭き痛み冬三日月  
電線統べりゆく東京の雪女郎  
一つとて無駄なし寺の寒厨  
補聴器に忍び泣きあり雪女郎  
吊革へ背伸びしてをり春近し  
寒卵白寿の母の針仕事  
胸高に紅き帯しめ雪女郎  
雪女郎笑む踏切の向かう側  
外廁への灯り揺らぎて雪女郎

公子  
由紀子  
美智枝  
茂子  
真理  
幸代  
美紗子  
多美子  
マスマ  
八洲男  
廉三  
雄二郎  
月を  
喜久  
史代  
広子  
知子  
由美子  
千春  
萬蝶  
理恵  
玲子

光が丘俳句教室 (東京)

豆撒くや子等と一緒に燥く犬  
水仙の花活けられて猶気取り  
打ち豆も声も控へ目鬼は外  
豆撒で腹のふくるる齢となり  
水仙や思ひの深さだけ薫る  
豆を打つ鬼に命中せぬやうに  
蛸 蛸 の 会 (浦和)  
朱に紅鬼女を誘ふ椿山  
一本の椿際立つ青磁花器  
片栗の花のにぎはひ風しづか  
古布生きて吊し飾りの椿かな  
スノームーンを横切るジェット梅匂ふ  
堀越しの誘ふ気配や夜の梅  
大鉢の幸ひの木や葉ゆる

守伊  
はる  
康子  
史子  
野人  
理恵  
礼子  
宣子  
さち子  
元美  
鶴城  
月を

青 葉 の 会 (浦和)

合格の知らせ舞ひこむ春の朝  
街道の甘酒茶屋に大草鞋  
朝日さす障子の外の初音かな  
通り過ぎ路地裏からの匂鳥  
早春や保育園児の乳離れ  
鶯の日に日に上手く聴こえけり  
円 卓 の 会 (浦和)  
菜の花や仔山羊と遊ぶ男の子  
修二会に集ふ自称善男善女かな  
薄水や半濁音に割れてみる  
道標の気になるゆがみ別れ霜  
柿 の 木 塾 (浦和)  
地酒酌むしめはおむすび蜆汁  
句なれど真空パックの蜆かな  
ライオン像のたて髪つたふ春時雨  
蜆舟むかし栄華の十三湊  
青空の半分ありて春時雨  
蜆汁人類が火を得し昔より  
眼を病んで耳聴くなり春時雨  
今頃は改札あたり蜆汁  
ざつくりと椀で量りし蜆壳  
春しぐれ盲導犬と共に濡る

美子  
啓子  
公子  
洋子  
和子  
輝翠  
翔太  
月を  
鶴城  
惠子  
俊晴  
清昇  
水尾  
光弥  
節代  
和葉  
かつ子  
和子

若狭水明会 (若狭)

下萌えや雲浜像のお足元  
 吊橋の揺れて鶯谷渡り  
 窓越しの初音や母に手招きす  
 思ふこと絞りきれずに下萌える  
 座敷戸を放ち初音を待ち居たり  
 良き事の予感ふつつ初音かな  
 鶯や試合開始のホイッスル  
 日の神も寝転べ萌えの若草山  
 川の音はころがる如し草萌ゆる  
 意気込みの担ひ手農家下萌ゆる  
 下萌えや歩き初む子にあそばれし

阜月の会 (浦和)

褒められて伸ぶる幼や草萌ゆる  
 日脚伸ぶ母の形見の鯨尺  
 細腕の茶店暖簾や梅匂ふ  
 余生なほ心待ちなる二月尽  
 早春の土手に多勢の豆画伯  
 瑠璃散らし畦をいろどる犬ふぐり

櫟の会 (浦和)

湯島経て産土訪ふや梅日和  
 盆梅をひねもす眺むコロナ風邪  
 二月早や森に呼応の鳥の声

初花 和風 白鷺 冬至 保人 郁鼓 寛久 祥子 想子  
 静香 孝磨 カズ子 久子 曆文 さいち

富子 彰二 千重子 ☆ ☆

咲き盛る小鉢の梅や違ひ棚  
 香氣満つ野点雅びに梅の園  
 梅一輪また一輪と生まれけり  
 落款の散りばむ大地梅一樹  
 和歌山水明句会 (和歌山)  
 羽のやうな靴欲しくなる梅日和  
 狍犬の鼻孔ふくらむ梅の花  
 旧道は番傘の幅水仙花  
 違ひ箸の上手な曾孫寒戻り  
 がんばれと集ふ砂浜冬の宿  
 鴨十羽集まり春の談議かな  
 ふと思ふ姑の撫で肩枝垂梅  
 鷹のシヨー城の鳶ども急降下  
 水明松本句会 (松本)  
 早春の天城峠や炉端焼  
 山葵田のやつと目覚めの花の笑み  
 クシヤミ出るコロナ? 違うよ花粉症  
 あたたかな陽に呼び出され落のたう  
 豆打ちて一人住居をにぎやかに

萬二郎 裕之 克之 朋子 和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廸代 恒子 陽子 マリス 玲子 寿子

通信指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信指導を実施しています。希望者は、左記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

記

〔指導者〕 境 延昭

〔作品〕 七句 「受講料」 千円

〔方法〕 ①用紙自由②住所・氏名・

電話番号を明記③84円切手同封

④返信用封筒は不要⑤締切は随時

〔送付先〕 境 延昭

〒三三七―〇〇四―さいたま市

見沼区南中丸一―一―四一

電話 〇四八―六八六―二二八―

# 水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼題

「春の風」(はるのかぜ)

「蜂」(はち)

「遊」詠込み

(注1) 例句 たんぼぼに影の無き子と遊ぶかな

耳搔きが耳で遊べり花雲

春日 烏宇  
小田島亮悦

(注2) ○野遊び・山遊び、船遊び、等季語は不可。

句数

通じて二句。(一組)

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料

一組につき千円。

締切

五月九日(発行所必着)

※投句用紙(水明三月号・四月号に添付)使用のこと。コピーも可。

# 第2回「水明忌」

大村 節代

水明忌は去る二月二十三日に市民会館うらわで催された。当日は雨から曇りという天気予報とは裏腹に、すっきり水明晴れとなった。水明忌の会場には、水明旗、四人の先師の遺影と供花が飾られた。兼題句の投句が十一時に締め切られ、正午に開会する。まず一同起立して四人の先師の遺影に黙祷を捧げる。

司 会

山中 順子

開会の辞

星野 和葉

主宰の挨拶

「本日は新しい方も参加されているので、水明忌の何たるかを少しお話したいと思います。長谷川かな女初代主宰が創立した「水明」はかな女師が亡くなられ、長谷川秋子二代目主宰が継ぐも、昭和四十八年二月に四十六歳という若さで亡くなられた。かな女、秋子の二代主宰を支えた私の父、山本嵯迷も同年同月に亡くなったので、秋子・嵯迷両師を如月忌として、長年修してきました。その後、星野紗一三代目主宰の紗一忌が加わり、かな女忌・如月忌・紗一忌と水明では三つの忌を修していました。先年、星野光二代目主宰が亡くなられたのを機に、創始者かな女の「り

んどう忌」と嵯迷、秋子、紗一、光二の四人の先師の忌を「水明忌」として昨年から修する事になりました。本日は二回目の水明忌です。皆様のご健吟を楽しみにしています。」

選句 主宰は多選

雪欄作家十句、一般参加者五句

披講

一般選 日高 徹

雪欄選 茂木 和子

主宰選 主宰

主宰詠

通ひ路の梅に付けたし源氏名を

拙宅にいま妙齡の枝垂梅

主宰選

・三極（天・地・人）

白梅に行ち紅梅に歩を進む

男坂白梅の香の駆け上がる

封切れば墨の匂ひの花便り

・特選

絵馬に願ふこと幾度ぞ梅の宮

白梅や母の形見の五つ紋

紅梅や我に無用の恋占ひ

レグホンの汚れぬ胸よ草萌ゆる

山中順子  
栄子  
光子  
茂木和子

かつ子

寛治

治江

蒼天を画布となしたる梅の花

玲子

本心を曝せぬ少女梅の花

恵子

人力車のをとことをんな梅の宮

節代

・準特選

耳飾り些と重たげに春の風邪

延昭

白梅咲くその名ゆかしき「雪月花」

マスマ

万葉の歌低吟す梅の里

正信

少女期の含羞に似て梅一輪

喜恵

古木にも古木の力梅咲けり

栄子

不時着の紙飛行機や梅真白

徹平

梅香り天平美人なる心地

理恵

梅まつり野点の帯の凜たるや

鶴城

青空と薨が似合ふ梅の花

俊晴

・普通選

晴天でなくてはならぬ梅二月

山中順子

暖れ声の恋猫熱を計りたまへ

和葉

白梅の香りをやか女坂

寛治

白梅を湯宿の下駄を鳴らしつつ

延昭

枝垂梅水子地蔵に寄り添うて

マスマ

梅白し庭に媼の小さき畑

徹雄

蒼天に突き出す一枝梅の花

大場順子

海老腰の姫茶を出す梅の宿

正信

盆梅やグランドピアノに鍵の穴

喜恵

野路の梅小枝たくまし風廻す

治江

古木なる幹に住むらし梅の精

鈴木和子

瓜割の句碑に水音水明忌

茂子

末吉の御神籤枝に梅の花

徹平

老梅や枝うつし世に夢咲かず

理恵

ハイヒールこつこつ春を連れて来る

真理

大凶は神に返して梅の花

かつ子

梅月夜考に一本供へけり

徹

曲屋の奥も曲屋梅屋敷

清

紅椿一輪卓に水明忌

でん治

枝垂梅胸までしだれて来るなんて

茂木和子

紅白に綾なす林梅浄土

玲子

洗ひ立てのシーツ孕ませ梅の風

みどり

猿回しの猿は「モモチやん」梅祭

絹映

背戸道に誘ふ梅の香朝早し

鶴城

梅林の主死すとも香を放ち

章嘉

梅が香や心の底に湧く力

公子

富士愛でて紅梅愛でて梅日和

水尾

寺井汲む風立つ朝の梅匂ふ

義子

白梅の名は雪月花今盛り

美佐尾

東雲に梅の一枝水明忌

はるみ

五百年生きる比丘尼や臥竜梅

恵子

朝のミサ梅が香に祝ぐ父の声

光子

紅梅や娘七つのままでよし

由紀子

梅枝は節くれ立ちてなほ壯ん

俊晴

到来の菓子に一枝梅の花

節代

一般選、雪欄選、主宰選の披露が無事終了

後、主宰の講評があつた。主宰は全句を丁寧

に良し悪しを指摘され、添削された。出席者

一同大いに勉強になった事と思う。

主宰から三極には色紙、特選には短冊が授

与された。尚、高得点者に水明より記念品が

贈られた。

高得点者表彰

一位 石山かつ子 五位 高島 寛治

二位 森川 義子 六位 石井 喜恵

三位 井上 玲子 七位 大塚 茂子

四位 越田 栄子 八位 神田 治江

境延昭氏の閉会の挨拶により水明忌は無事

終了した。引き続き同氏の司会進行で懇親会

が催された。

懇親会はまず主宰の挨拶、乾杯の後、三極

(天・地・人)の方々の色紙、特選の方々の短冊、

そして高得点の方々の雛人形等の披露等が行

なわれ、座は一気に和んだ。またの再会を約

し、名残りはつきないが閉会。

# 水明創刊 90 周年 記念祝賀会・全国大会のご案内

## ■記念全国大会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)  
受付開始 9 時 30 分 開会 10 時 閉会 15 時 30 分  
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和  
4 階「ロイヤルプリンセス A・B」  
〒330-0062 さいたま市浦和区仲町 2-5-1 ☎ 048-827-1111  
行 事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞の授賞、記念特別作品  
の授賞、新誌友紹介者の表彰、新季音同人、新同人の紹介、  
兼題入選句の発表・受賞・講評など

## ■記念祝賀会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)  
受付開始 15 時 30 分 開会 16 時 閉会 19 時  
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和  
4 階「ロイヤルクラウン A」(住所、☎は全国大会に同じ)  
行 事 来賓挨拶、俳壇著名人のビデオメッセージ、大福引大会など

## ■参加費 (5 年前の水明 85 周年記念祝賀会・全国大会と同額)

記念全国大会・祝賀会 25,000 円 (昼食付き)  
記念全国大会のみ 8,000 円 (昼食付き)  
記念祝賀会のみ 20,000 円

## ■宿泊斡旋

宿 泊 日 令和 2 年 6 月 28 日 (日) および 29 日 (月)  
宿 泊 先 ロイヤルパインズホテル浦和  
宿 泊 費 シングル 11,500 円 ツイン 10,500 円 × 2 = 21,000 円  
\*ともに朝食・消費税・サービス料込み  
\*料金は令和元年 7 月現在のものです、今後変更の可能性あり  
\*支払いはチェックイン時にホテルへ直接お願いします

## ■申込み締切 令和 2 年 6 月 15 日 (月)

◎減多に無い貴重な機会です。ベテランはもとより、新入会員の方々も  
お誘い合わせて多数ご参加下さい。みんなの力で祝賀会・大会を盛り  
上げましょう。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

# 水明創刊 90 周年 記念特別作品募集

記念祝賀会・記念全国大会のご案内の通り、水明創刊 90 周年を記念して、下記の要領で俳句・エッセイ、評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外はどなたでも応募できますので、奮ってご投稿下さい。なお、受賞者の表彰は 6 月 29 日の記念全国大会で行います。

## 応 募 要 領

**【応募資格】** 選考委員を除く全ての水明会員。

**【応募部門】** ①俳句作品：30 句（400 字詰原稿用紙を使用）

②エッセイ：1 篇（400 字詰原稿用紙 6 枚程度）

③評 論：1 篇（400 字詰原稿用紙 12 枚程度）

◆原稿用紙は各部門ともに、タテ書き用 B 4 判 400 字詰を使うこと。

◆文字は、選考委員が容易に判読できるよう楷書で丁寧に書くこと。ワープロやパソコン入力による原稿も可。

◆いずれも未発表作品に限る。（水明誌および外部に発表した作品は不可）

◆最初のページの 1 行目に表題（タイトル）を書き、その下に姓名（俳号）を書く。

◆複数部門への応募も可。

**【応募締切】** 令和 2 年 3 月 31 日

**【作品送付先】** 〒 339-0067 さいたま市岩槻区西町 5 - 6 - 38

山中順子 宛 \*「記念特別作品」と朱書する。

**【選考委員】** 主宰・山中順子・星野和葉・境延昭・五明昇・網野月を

◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、授賞者を決定します。

**【授 賞】** 俳句・エッセイ・評論それぞれの部門に授賞します。

正賞：各部門とも賞状と副賞 5 万円

準賞：各部門とも賞状と副賞 2 万円

◎ご質問・お問い合わせ

実行委員長 山中順子（☎ 048-756-1253）へお願いします。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

風 声

○俳句四季二月号「季語を詠む・春夕焼」欄

綿飴を春のゆやけが包みこむ

山本鬼之介

——「今月の華」欄

マネキンを目白へ運び冬霞

山本鬼之介

見開き二頁にわたり山本鬼之介主宰が思い出のペーパーナイフの写真とともに、掲句の作句当時の思い出を語られている。

○俳句界二月号「全国の秀句コレクション」欄

散り残る萩の白さよ夕の風

野田 静香

山本鬼之介主宰の句評とともに紹介されている。

○現代俳句二月号「結社の若手」(7)

「水明」の若手もう一度新人、もう一度青春

網野月を氏の文章により、ここ数年に水明に入会し、且つ現代俳句協会に入会した十一名の会員を紹介。

○現代俳句二月号「現代俳句の風」欄

極月やビルの壁這ふ命綱

大塚 茂子

喪の客となりし故郷掘炬燵

川島 典虎

空青しがくんがくんと蓮枯れて

岡野 順子

A面もB面もなく大海鼠

由良ゆら女

○現代俳句二月号「現代俳句の風」秀句を探る

安藤玲子氏の感銘十句抄に

岡野 順子

空青しがくんがくんと蓮枯れて

岡野 順子

久保俊一氏の感銘十句抄に

岡野 順子

A面もB面もなく大海鼠

由良ゆら女

横山いさを氏の感銘十句抄に

喪の客となりし故郷掘炬燵

川島 典虎

○玉梓(名村早智子主宰) 一、二月号「他紙拝見」欄

散り初むる萩を片方の冠木門

鬼之介

○くぢら(中尾公彦主宰) 二月号「受贈俳誌美術館」欄

荒神の社も覚めたか初明り

鬼之介

○太陽(柴田南海子主宰) 二月号「一誌一耀」欄

晩秋の夕陽あまねく水車小屋

鬼之介

○天塚(宮谷昌代主宰) 一月号「珠玉一句」欄

散り初むる萩を片方の冠木門

鬼之介

○草笛(太田土男代表) 二月号「受贈誌一詠」欄

誰がための拳手の札かな秋の海

鬼之介

○菜の花(伊藤政美主宰) 二月号「諸家近詠」欄

瀧行の禪つかれ冷まじや

鬼之介

○新月(松田碧霞代表) 二月号「受贈俳誌紹介」欄

晩秋の夕陽あまねく水車小屋

鬼之介

○好日(高橋健文主宰) 二月号「受贈誌御札」欄

散り初むる萩を片方の冠木門

鬼之介

○鳩の子(柴田多鶴子主宰) 二、三月号「受贈俳誌御札」欄

たのもしくなりし記念樹文化の日

鬼之介

(日高徹抄出)



# 水明発展基金御札

(敬称略)

— 令和二年二月二十九日現在 —

松本	光子	10	口	福田	千晴	5	口
宮崎	チアキ	5	口	熊倉	千重子	5	口
山口	富子	3	口	原田	秀子	10	口
山本	鬼之介	50	口	由良	ゆら女	20	口
小林	萬二郎	30	口	永野	史代	10	口
小倉	倭子	20	口	南條	さわゑ	5	口
水落	守伊	5	口	山口	韶子	3	口
川野	妙子	10	口	五明	昇	10	口
井上	燈女	5	口	矢島	清	10	口
曲淵	徹雄	10	口	綿貫	久子	5	口
野平	美紗子	5	口	高橋	満耶子	5	口
森下	美智枝	5	口	田中	章嘉	5	口
鳥羽	和風	10	口	川崎	道子	10	口
宇田	白鷺	10	口	十倉	和子	10	口
岩田	儀勝	5	口	西幅	公子	5	口
岡野	順子	10	口	西浦	千枝子	10	口
保坂	翔太	5	口	鶴川	山百合句会	3	口
佐藤	克之	3	口	宮井	美恵子	5	口

## 水明発展基金募集のお願い

○ 一口千円 何口でも何回でも何時でも。

○ 振込口座番号 00130-5145024

○ 領収証は発行せず、その都度「水明」誌上に掲載してお礼に代えます。

水明俳句会・水明発展基金

大橋	廼代	10	口	内田	恵子	2	口
原田	想子	10	口	日高	徹	2	口
		(小計357口)		鈴木	和子	1	口
— 水明忌にて —				神田	治江	1	口
青木	鶴城	1	口	越田	栄子	1	口
丸山	マスマ	1	口	大塚	茂子	1	口
大場	順子	1	口	茂木	和子	2	口
井口	俊晴	5	口	石井	喜恵	1	口
大村	節代	2	口	加藤	でん治	1	口
松本	光子	1	口			(小計23口)	
				— 合計380口 —			

## 後記

昭和20年3月10日は、東京大空襲の犠牲になって亡くなった夫の父の命日になる。私は一度も会っていないが、毎年浅草で行われる慰霊祭にはお参りにいつている。9年前も浅草にお参りに行きほつとして帰宅した。その時3月11日の東日本大震災をニュースで知り身のふるえたのを覚えている。また、新型コロナウイルスの感染拡大により公共の利用施設が休館となり、それにつれて俳句の講座も休講になってしまった。目に見えないウイルスに手も足も出ない人間の弱さをまざまざと見せつけられている。マスクが無い、ティッシュ、トイレレットペーパーを買い溜めする不安感。しかし人間は何にも負けない知恵があるのだからさつとこの難関は突破できると信じて、与えられた個々の力を頼りにして乗り切りたいと思う。

俳句を作っている時がこの時期を忘れる事が出来る。みんなでがんばろう。(順子)

「幸せな女に見えるコート欲し」  
「三椶の盛り我らも三婆に」  
右の二句は新聞投句による作品で大いに私を喜ばせてくれた。  
「幸せな女：」この句は個人的にいろいろ見解が分れる所だが、外見だけでその人が幸せか不幸せか個人差があるので見極めは難しい。「襦袢を着てても心は錦」と云う云い方があるので、それはそれでなる程と納得してしまふ。

張ろう。(和子)

「三椶の盛り：」中国原産の三椶は、落葉低木で枝は三つに岐れその先が又三つに岐れ葉に先立つて球形の頭状花を下向きに咲かせる。律義で風情のある花である。仄かな香も楽しめる。その形から三椶の花盛りと三婆の組合せ、ユニークで楽しい取り合せ、三婆の会話が賑々しくも愛しい。

紗一先生から若さを保つ三ヶ条を教えて頂いた。①お酒落心を持つ②外に出て刺激を受ける③会話をし、お喋りを楽しむ等々。未だ遅くはないゾ。頑張れる所まで頑張ろう。

新型コロナウイルスの感染拡大には、本当に困っています。何時まで続くのでしょうか。学校はお休み、イベントもだめ、いろいろな施設が使えなくなり、旅行も見合わせています。

ところで「折角計画したのにおジャンになった」なんて良く言いますね。この「おジャン」は江戸時代の火事の時に打つ半鐘の音だそうです。この打ち方は、火元との距離により異なり遠くの場合は「二つ半」近くになるに従って「三つ半」「四つ半」となり、最も近い時はたて続けに打たれたようです。そして、鎮火するとその合図に、ジャンジャンと二回、ゆっくと鳴らされ、これを「しめり」と言ったそうです。しめりのジャンが鳴ると火事もおしまひ。ここから物言の終りを「おジャンになった」とか「おジャンになった」と言うようになりました。普段、何げなく使っている言葉も、元を正すと面白いですね。(ことばの豆事典)より

<h1>水明</h1>	
令和二年四月号	
通巻一〇七五号	
令和二年四月一日発行	
発行人	山本 鬼之介
〒330-0073	さいたま市浦和区野町一七二一八
電話	048-886-1600三
発行所	水明俳句会
〒330-0064	さいたま市浦和区野町四一〇二二
電話	048-822-1474一
誌代	半年分 六、〇〇〇円
	一年分 一一、〇〇〇円
同人費(誌代を含む)	一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費(誌代を含む)	一年分 三〇、〇〇〇円
振替	〇〇一七〇〇〇一九三九三
印刷所	中央美版



# 水明全国大会参加申込書

〈申込締切 6月15日(月)〉

1. 記念全国大会・祝賀会参加 6月29日(月) 会費 25,000円
2. 記念全国大会のみ参加 6月29日(月) 会費 8,000円
3. 記念祝賀会のみ参加 6月29日(月) 会費 20,000円

- ~~~~~
4. 宿 泊 幹 旋 〈シングル・ツイン〉 ホテルで個人精算  
※上記の希望項目の数字並びに宿泊幹旋ご希望の場合は、  
シングル・ツインのいずれかを○で囲んで下さい。  
但し、シングルの希望者が定員を超えた場合は、ツイン  
にさせていただきます。  
※前泊をご希望の方は必ず明記して下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

※なお、参加費を振込で別途送金される方は、下表の  
「申込金支払方法」の振込を○で囲んで下さい。

2020 年 月 日

住 所	〒		
氏 名		電 話	( )
申込金支払方法	現 金	振 込	

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)  
水明俳句会





# 季音抄

山本 鬼之介

春近し小なき帆の立つオムライズ  
斜に構へたるお見合の春裕  
暮六つに泣く赤ん坊猫の妻  
人力車にをとことをんな梅の宿  
身の上を語り出したる春シヨール  
灰色に舞ふ片恋の春の雪  
寒明の空に切り込む竹とんぼ  
男坂白梅の香の駆け上がる  
強東風の抉りゆきたる魚鼓の腹  
下萌えて御伽草子のやうな里  
風花や駒留め残る上州路  
肘を付く出窓の少女春の風邪  
猫柳活けて水辺の風を呼ぶ  
春寒し雲なき空の底光り  
待ち合はす春の時雨の二月堂  
あのあたり賢所ぞ寒鳥  
沼と言ふ大き鏡や帰る雁  
爪革の緋色に溶くる春の雪

石井 喜恵  
石山かつ子  
大橋 勉代  
大村 節代  
栢尾さく子  
菊池ひろこ  
荒井 俱子  
高島 寛治  
十倉 和子  
柚木 治子  
松本 光子  
小倉 倭子  
井上 玲子  
松井由紀子  
梅澤 佐江  
秋山 冷子  
矢島 清  
福田 千春

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

## ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

## ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

## ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本 鬼之介

一葉の肩を揉みたし冬柳  
 日脚伸び舟の影曳く佃島  
 人日や列なして観る「ミイラ展」  
 出囃子の音一月の六区街  
 目が覚めて夢の彼方へ宝船  
 寒紅や鏡の中に違ふ顔  
 読初は書棚の中の風雲児  
 二枚刃の剃刀の傷鏡餅  
 蠟梅の気付かれぬやう気付くやう  
 冬の霧口のほぐれぬバスガイド  
 空を切る手新鮮やか初かるた  
 底冷や鞆に捜す家の鍵  
 御仏の口に引きたや寒紅を  
 婿殿の切りし伸し餅初明り  
 豪快に伯方塩撒く初相撲  
 着る事の無きや春着を吊し見る  
 地震の跡のこる原野の若菜摘む  
 日脚伸ぶ少しスリムに影法師

保坂 翔太  
 野田 静香  
 正木 萬蝶  
 河野はるみ  
 日高 徹  
 越田 栄子  
 近藤 徹平  
 青木 鶴城  
 渋谷きいち  
 曲淵 徹雄  
 大塚 茂子  
 染谷 正信  
 神田 治江  
 宮崎チアキ  
 原田 秀子  
 飛永 鼓  
 加藤でん治  
 新 暦文

句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境 延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中美どり 太田 絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアル	山本鬼之介	五明 昇雄 曲淵 徹
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境 延昭 石 井 喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 江み 河野はる
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉代	森本 早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中 順子	西山 貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石 田 慶子

## 水明例会案内